

42236

教科書文庫

4
810
42-1927
200030
1909

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

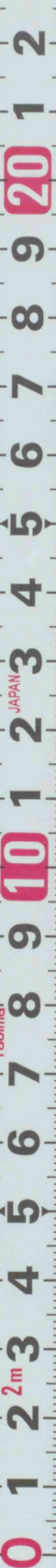
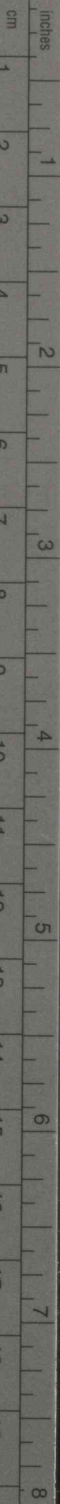


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Ha7
資料室

訂改
女子新國文
卷七



資料室

375.9
Ha7

日二十月一年二和昭 濟定檢省部文
用科語國校學女等高

編一矢賀芳 士博學女

文國新子女 改訂

七卷



京東
先發房山富 會合社資



上本日く咲櫻

二

筆月故澤矢

行西



訂改
女子新國文 卷七目次

- 一 京都御所拜觀の記……………吉田絃二郎…六一
- 二 櫻咲く日本よ(自修文)……………宮崎丈二…二三
- 三 生命の潮……………宮崎丈二…二三
- 四 櫻あらしそひ(狂言)……………四
- 五 光堂……………泉鏡花…二六
- 六 をりふしの移り變り……………吉田兼好…二四
- 七 晩春の別離……………島崎藤村…二六
- 八 節供と家庭(自修文)……………倉橋惣三…二八
- 九 松下禪尼と最明寺入道……………吉田兼好…二四
- 一〇 松下禪尼……………四二
- 一一 最明寺入道……………四二

一〇 櫻井の驛……………(太平記)……四
 二 東下り……………(伊勢物語)……四
 三 上野と淺草……………齋藤綠雨……五
 三 喬木……………萬造寺齋……五
 四 信濃路の旅……………正岡子規……六
 五 坐り(自修文)……………山本有三……六
 六 百花譜……………大町桂月……七
 一七 春の句、夏の句……………八〇
 一八 をさな兒……………小林一茶……八二
 一九 川柳點……………金子元臣……八四
 二〇 小松内府その一……………(平家物語)……九〇
 二一 小松内府その二……………(平家物語)……九五
 三 武士の風流(自修文)……………九九

二三 畫題としての源實朝……………佐々木信綱……一〇四
 四 平家の都落……………高山林次郎……一〇
 五 池大納言頼盛(自修文)……………田山花袋……一二
 六 ここまで来た……………野口米次郎……一二
 七 美しき故國……………矢代幸雄……二四
 六 妻の眞心……………佐々木信綱……三〇
 元 女子と文學……………三三
 三〇 蓮月尼の半面……………武島羽衣……三九
 三 十六夜日記……………阿佛尼……四五
 三 雲の峰(自修文)……………相馬御風……四九
 三 西湖の月……………谷崎潤一郎……五五
 四 琵琶行……………(唐物語)……六四
 五 師の君へ(バリより)……………前田漢子……六八

改訂 女子新國文 卷七

一 京都御所拜觀の記

京都御所を拜觀したる時ほど、神々しかりしことなし。わが拜觀したるは四月半ば頃なりしが、殿掌なる人に導かれて、かきこころに麗かなる都の春は、たゞこの九重の中に籠れるが如く、踏む足も空にて、人間の世界を出でたるやうなり。

私に承るに、皇居は初よりここにありしに、あらず。平安時代の末よりをりをりの里内裏となり、今より五百餘年前よりここに定まりしなり。百十餘年前天明の大火後、幕府勅命を受け、老中松平定信に命じて、新たに造營の工を起す。從來略式にのみなり行きし皇居

神々し

殿掌

踏む足も空

里内裏

古典政庁言葉集
殿掌に上殿掌より殿掌

復り再りせむ事

又り偉つた
孝聖天皇の御
代元年は紀
元二五十四年

短冊
たはさく

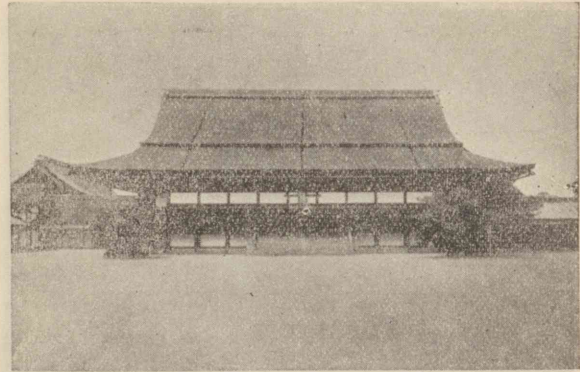
紫宸殿
故實をたゞす

賢聖障子
(一)有名な畫家
清和陽成光
孝聖多醜
の五朝に歴
仕納言に
至つた

も、この時より儼然として舊制に復したり。然るに安政元年復大火に遭ひ、更に造營の工事あり、概ね定信が定めし式に従はしめられたる、即ち今の御所ぞかし。
紫宸殿清凉殿等は定信が深く故實をたゞし、平安時代の舊制に復せしものなり。今の御所もまたこれに倣へるものにして、千年の昔を目のあたり見る心地す。
紫宸殿は皇居の正殿にして南面し、その前に南庭あり。階前の左右に左近櫻右近橘の二本の樹ある外は塵も留めず。今は春の日の、一面に敷きつめたる砂を射て、眩きばかりなるが、元日の節會に、ほのぼのと明けはなれたる初日の光など、いかにめでたからんと覺ゆ。
殿は廣き一面の板敷にして、中に唐代の賢臣をゑがける襖あり。いはゆる賢聖障子にして、昔は巨勢金岡の筆になれるものなりき。

階下
殿下
御下
御下
御下

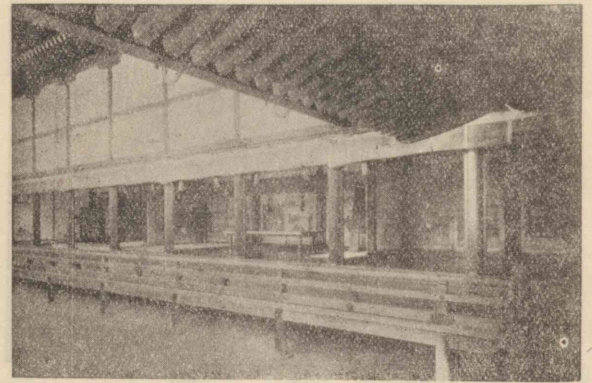
御帳臺
威儀の人
世移り風變る



紫 宸 殿

といふ。明治天皇も、先帝も、いづれもここに御即位の式を挙げ給ひしなり。大正四年の大典には余も参列者の一人たる光榮を擔ひしが、この日紫宸殿上には天皇陛下の高御座と、皇后陛下の御帳臺とを据ゑ、階下近く立てたる日光月光の大旛をはじめとして、紅、黄、綠、紫、幾十の大旛小旛の風に翻れるも麗しく、威儀の人の黒袍、紅袍、鉦鼓の人の綠袍にてゐる並びたるもいかめしかりき。廻廊には大禮服の文武官、燕尾服の衆議院議員、外國使臣も交りて、その對照まことに
おもしろく、古今東西の文化を集めたる盛觀とぞ覺えし。俗に世移り風變りては、日常の清凉殿は昔は主上の御居間なりしが、

母屋
塗籠



の側を流る。

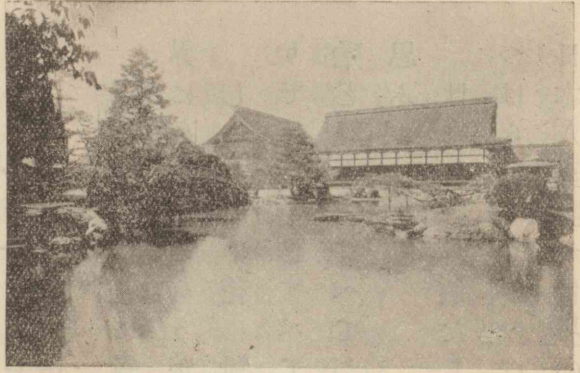
清涼殿

御起居に適せずなりて、近世はたゞ上古の形を存したるなりと申す。正面の母屋に晝の御座あり。御帳臺を立つ。傍の塗籠は夜御殿とて、御寢室なり。左右の別室には、殿上といひて、殿上人の宿直する所などあり。前の廣庇に立てたる衝立に、年中行事障子、昆明池障子あり。昆明池障子に近く荒海障子あり。また殿上の外の渡廊に馬形障子あり。上古のは金岡の筆にして、夜々脱けいでて萩の戸の萩を食ひしかば、勅ありて、くつわをゑがき加へしめられたりと傳ふるはこれなり。清涼殿は東面にして、階前左右に河竹、吳竹を植ゑ、御溝の水そ

加茂川

林泉の巧
(一)賀茂川の名
(堰)

(二)比叡山の一支
峰。



小御所

一わたり拜觀したるばかりにて、よくは覺えず。九重の雲深き御あたりのことを書出づるも畏しや。

その他には小御所御學問所常御殿等あり。いづれも近世の様式なり。小御所御學問所は謁見など仰せつけらるゝ所をりにより拜謁者の階級によりて、ここかしこの別あり。常御殿は即ち御居間と申す。その東の御庭、林泉の巧いふばかりなし。蟬の小川をせき入れて池をたゞへ、池邊には花木を植ゑて、四季の眺絶えず。東山一帶また一眸の中に入る。殊に彼方の木立少し切下げたるは、如意嶽の大文字の火を望み給はんが爲とぞ。

(一)西行の歌。一首の意は、一時の身では同様の花を見ることにはできないから、身も分けくつにも分けたい。全国の花の盛を見たこと。愛着にひかされること。

祖國 祖先からの國。

自修文

二 櫻咲く日本よ

吉田絃二郎

(一) 身を分けて見ぬ梢なくつくさばや

よろづの山の花のさかりを

これほどに花に對して貪るばかりの愛着を感じた詩人が、世界にあるであらうか。

しかし、この花に對する愛着の念は、日本人になれば西行ばかりでなく、殆どすべての人に見出すことができるはずだと思ふ。殆ど私たちがすべてが春になれば、見ぬ梢なく花を見つくさうと思ふ。

日本といふ私たちの祖國が、一番はつきり私たちの心に刻みつけられてくるのは、櫻の花が咲く日である。花が咲いてくれば、日本人全體が、世界のどこの詩人よりも花を愛し、花をたへることを知つてゐる。西行の歌はたまたま日本人のすべての櫻の

旅枕 たびね。

(一)福島縣石城郡 窪田村。

(二)岩手縣西磐井 郡平泉村。

潮煙 海水のしぶき。

聖地 聖地。

(三)Chaucer. イギリスの詩人。(西曆一三〇〇年)一四〇〇年。

(四)Canterbury Tales. イギリス古文の傑作である。叙詩である。ロンドンからカンタベリに参詣する三十二人の人々が馬の上で物語つた小説を集めた體に作られた。カンタベリはロンドンで、東南五哩の宗教上の首府である。

花に對する愛着を、代言したものに過ぎない。

私は日本に生まれたことを有難いと思ふ。殊に花が咲く日にしみじみそれを感じる。

山の雪が解けはじめ。もう南の方からは花のたよりがくる。三月も半ば過ぎれば、薩摩、日向あたりの山櫻が咲きはじめる。その頃南方を立つて北の方へと日毎旅枕を重ねる人々は、三月の二十四五日頃になれば北九州の山櫻が綻びてゐるのに出會ふ。中國から畿内、東海、東山と、北へ北へと旅を續ければ、短い花の命とはいふものの、勿來關平泉まで行くうちには、四十日以上の花を見ることができる。全く三月から四月と日本國中が花に包まれてしまふ。潮煙に閉ざれて、あるかなきかに見える小さい隱岐や對馬の島々までもが、日本である限りは、雲のやうな花に包まれてゐる。

西洋では聖地巡禮といふことが昔からある。チヨースーの

札所めぐり
禮拜の功德を
つむ爲に佛閣
なめぐること

(一)歌僧。俗稱佐藤義清。建久元年(一八五〇年)寂。年七十三。

世捨人
僧

(二)西行の歌集山家集にある。

貪慾
慾の深いこと。
(三)心なき身にもあはれはしき立つ澤の秋の夕暮(西行)

ンタペリー物語などを讀むと、今の日本のお彼岸の札所めぐりを思ひ出すが、もうあゝいふのんきな遍路は、かの地では遠い昔になくなつてしまつたであらう。

日本ではまた四國めぐり、大和めぐり、どこそこの新札所めぐりといふものが、なかなか盛である。そして、それは花の盛を中心にして行はれてゐる。札所めぐり、聖地めぐりといふが、實は花をめぐりての旅である。花遍路である。西行にしたところ、實に一生花をめぐつての旅人であつた。花巡禮であつた。彼は秋の山に鹿も聽いた。雪の野も歩いた。彼は寂しい世捨人のやうにも思はれる。けれども彼くらゐ日本の春を愛し、日本の春を解した詩人はないであらう。

願くは花の下にて春死なん
その二月のもちづきのころ
彼は春に對しては貪慾であつた。しぎたつ澤のほとりの秋を

相
すがた。あり
あはれ。

刹那
瞬間。

(1) Wordsworth
イギリスの詩人。(西曆一七五〇年—一八七〇年)

(2) Emerson
アメリカの文學者。(西曆一八〇三年—一八八二年)

(三)芭蕉の句。



(筆璋頼中田) 春

見た頃は、恐らく彼は人生無常の相をそのまゝに受容れて、死も恐れなかつたであらう。けれども再び旅に春を見た刹那、吉野の花に包まれた日に、彼の執心は燃えたであらう。彼は二十年も三十年もなほ生き續けて行きたいと思つたであらう。ウォーヅウオースであつたか、エマーソンであつたか、ちよつと忘れたが、この附近の風光は實にいい。たゞ一つ悪いことには、餘り景色がいい爲に、死ぬことがいやになる。といふ意味のことを語つたことがある。西行も恐らく同じことを感じたであらう。伊賀から大和への道すがら、春なれや名もなき山の薄霞と歌つた日、芭蕉も恐らく同じことを感じ

(一)蕪村の句。
(二)谷口蕪村。俳人かつ書家。俳天四三(二)年(三)天明三年(二)年六十八(一)歿。

淨化す
きよくする。

たであらう。菜の花や月は東に日は西に。蕪村ならずとも、春の日の日本に生まれた幸福を感じないでは居られないであらう。西行も芭蕉も世捨人である。しかし、印度あたりの世捨人とはまるで違つてゐる。どこまでも世を捨てきれぬ人たちである。彼等が世を捨てたといふのは、餘りに自然を愛したが故である。心ゆくまで自然に浸されたい爲に、暫く世の煩はしさを避けたばかりである。自然を味はふといふ點では、誰をも彼をも受容れてゐる。日本國中の人々と一緒に誘ひ出して、自然を味はつてゐる。日本人はこせこせしてゐるとよく非難される。しかし、花の盛の日本人を見ると、あながちさうでもない。花に恵まれた日本の自然が、春の日になれば、日本人の心を特に淨化してくれるのかわらぬが、ともかく花の盛の日本人は、愛すべき國民である。佛詣や神詣にかこつけて四國中をめぐり、大和をめぐつて、花を見て歩くことのできる子供らしさを失はぬ民族である。西行といひ、

の
た
ま
豆
や
田
子
ぬ
み
ゆ
み

萬葉時代
萬葉集の時代
の意。萬葉集
はわが國最古
の歌集で、淳
徳天皇の時に
仁天皇の時に
たの歌を集め
たもの。
分別くさい人
りきまへのあ
りさうな人。
(一)櫻本其角。芭蕉の門人。實
永四年(二)三
六七年(一)歿。
四十七(一)年
(二)服部嵐雪。芭蕉の門人。實
永四年(二)三
五十一(一)年
歿。

芭蕉といひ、一生のなまけものであつた。日本の秋を、日本の春を、残る限なく見つুকしたいが爲に、家業を捨てて歩きまはつた大きな子供である。

日本人ほど詩を作る國民は他にないであらうと誰でもいふ。私もさう信じてゐる。萬葉時代から日本人は、花下の行樂を無性に楽しむことを知つてゐた。日本人は愛すべきなまけものである。つた。その中でも一番大きななまけものが、西行と芭蕉とであつた。それから後の世の歌人や俳人たちは、分別くさい人たちが多過ぎてしまつた。其角にしろ、嵐雪にしろ、蕪村にしろ、分別があり過ぎる。このことは、歌人の場合でもやはり同じことだが。それはともかくとして、日本人がこれほど多く詩を作るといふことは、やはり恵まれた日本の自然からであると思ふ。日本に櫻が咲く間は、日本人は恵まれてゐると思ふ。日本人は詩を作ることを忘れてはならないと思ふ。

あてやか
上品。
(一)「さまざまの
こと思ひ出す
櫻かな」芭蕉

わけもなく懐かしい櫻。わけもなく暖かい感じの櫻。わけもな
く可憐な櫻。わけもなくあてやかな櫻。わけもなくあはれな櫻。わ
けもなく「さまざまのこと思ひ出」させる櫻。誰の爲に咲いてくれ
るのか、誰の爲に散つて行くのか、待たれる日のみ長くて、散るこ
との餘りに早い櫻。

無常の實相を餘りに美しくも、餘りに痛ましくも私たちの心
に刻みつけてくれる櫻。日本中の山も、原も、町も、けふは花の霞に
つゝまれてしまつた。私は恵まれた日本を思ふ。

西行も、芭蕉も、花の咲く「けふは」浮かれこそしたであらう。

けふは日本人にとつて一番明るい幸福の日である。と同時に、
一番ものあはれな日である。

三 生命の潮

宮崎 丈二

田圃の小徑に腰をおろし

長も 髪も
男小まにかよ
五平 存又とよ

新伴 伴
自由 伴
伴 伴

あたりを見ると、
どこにもここにも
もう春が萌し動いてゐるのが感じられる、
水の中にも、小徑にも、
枯草の中から萌出た若々しい緑や赤の芽よ、
初春の花の女神が行きずりに、
一あたり大急ぎでまき散らした寶石のやうなへうたん
さぐさの青い花、
たんぼもほのかに春の祭の燈明をともしてゐる。
卵のはいつた白い袋を腹に抱へた蜘蛛は、
枯草の間をいそがしく歩いてゐる。
水たまりの中には、孵つたばかりの何百何千ものおたま
じやくしが、

日本新報
初、女神、花田
春の女神、佐藤
姫 権

足利氏の
木坂より起
能
能
能

みんな頭をつゝこみ合ひ、しつぽを振つて、
一かたまりとなつてゐる。
まだ孵らないゆらゆらした卵の塊は、
暖かい日を浴びて孵るのを待つてゐる。
目高や、水すまし、
その他目には見えないやうなものまでが、
明るいぬくもつた水の中に生き動いてゐる。
萬物を新しい生命に蘇らす不思議な春よ、
生命の潮は 海の潮のやうに高まりあふれて來た。

四 櫻あらしひ——狂言

アト「これはこの邊のものでござる。このごろ何方も花の盛ぢやと

——日本詩集——

能
能
能

えいたさぬ

申すほどに、花見に参りたう存ずれども、暇がなさに参ることもえ
いたさぬ。もはや暇になつてござるほどに、けふは花見に参らうと
存ずる。まづ太郎冠者を呼出し、申しつけう。やい、やい、太郎冠者ある
か。シテ「はあ。アト、わたか。シテ、お前に居ります。

アト「汝を呼出すこと別のことではない。頃日は方々花盛ぢやとい
へども、暇がなさに、花見に行くこともならなんだ。もはや暇になつ
たほどに、花見にいでうと思ふが、なんとあらうぞ。シテ「これは珍し
いことを仰せられます。この頃は櫻の盛ぢやと申すほどに、櫻を御
覽ぜられうとあれば、尤もでござるが、珍しからぬはなを御覽ぜら
れて、何にさせらるゝ。アト「いや、おのれ何事をいふ。櫻も花も同じこ
とぢや。シテ「これは頼うだ人も覺えぬことを仰せらるゝ。さやう
に仰せられたらば、人中で耻をかゝせられう、身どもは苦しうござ
らぬが。アト「して、汝がそのやうにいふは仔細があるか。シテ「なかな

頼うだ人

言語道斷

でもないこと

(一)紀貫之の歌。拾遺集卷一春に出てる。

(二)平忠度の歌。平家物語卷九に出てる。

か、仔細わづかこそござれ。はなが見させられたくば、私が鼻を見させられ。他所へござるまでもござらぬ。アド、いや、汝は言語道斷げんごだうだんのことをいひ居る。汝が面こゝろは鼻といふ。花といふは別ぢや。シテ、さうではござらぬ。歌などにも櫻とは詠まれたれども、花とは詠まれませぬ。アド「なかなか、でもないことなにかをいひ居る。その歌を讀うで聞かせい。シテ「讀うで聞かせたらば、肝を潰つぶさせられう。アド、急いで讀め。シテ、心得ました。

(一)櫻ちる木の下かぜは寒からで

そらに知られぬ雪ぞ降りける

これはなんと。アド、此方にも花といふ歌がある。シテ、さらば讀うで聞かせられい。

(二)行きくれて木の下かげを宿とせば

はなや今宵のあるじならまし

(一)よみ人知らず。古今集卷一春上。

(二)小野小町の歌。古今集卷二春下。

總別むざとしたこと

シテ、此方にもまだござる。

(一)やま櫻わが見にくれば春がすみ

峰にも尾にもたちかくしつゝ

アド、それなら此方にもある。

(二)花の色はうつりにけりないたづらに

わが身世にふるながめせしまに

シテ、それならば此方に謠がござる。アド、うたへ、聽かう。シテ、櫻かざしの袖ふれて。アド、一段の謠うたふいたしやうがござる。やい太郎

冠者。謠、花見車くるゝより、月の花よ待たうよ。月の花よ待たうよ。

シテ、はあ、これでつまりました。アド、總別何も知り居らいで、むざと

したことをいひ居つて、某と競合せりあひ居る。彼方へ失せい。シテ、はあ。アド、えい。シテ、はあ。

—續狂言記—

(一) 岩手縣西磐井郡平泉村。嘉祥三年慈覺大師の開基したふ。

厨

五 光 堂

朝堂、金色堂

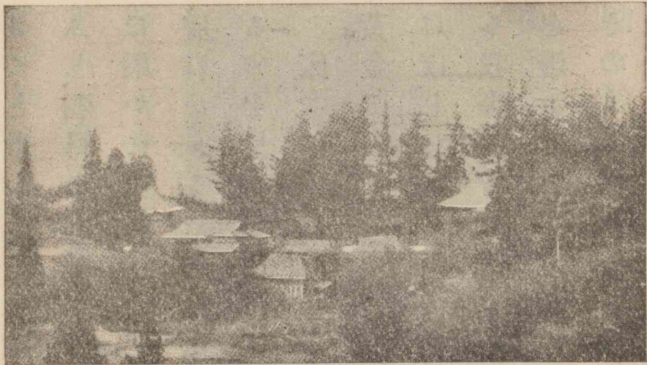
泉 鏡 花

山道二町ばかり、中尊寺はもう近い。大きな廣い本堂に、見上げるやうな釋尊の外、寂寞として何も無い。それが莊嚴であつた。日の光が幽かに漏れた。

裏門の方へ出ようとする傍に寺の厨があつて、そこで巡覽券を出すのを、車夫が取次いでくれる。巡覽すべきは、初め藥師堂、次に寶物庫、さて金色堂いはゆる光堂、續いて經藏、辨財天といふ順序である。皆參詣の人を待つて、始めて扉を開く。すぐまたあとを鎖すのである。寶物庫には番人がゐて、經藏には年紀の少い出家が、火の氣もなしに、一人經机に向かつてゐた。

初め藥師堂に詣でて、それから寶物庫を一巡すると、ここの番人のお小僧が鍵を手にして、一條道を隔てた丘の上に導く。階の前に

八重櫻が枝もたわむに咲きつゝ、かつ芝生に散つて、敷いたやうであつた。



中尊寺全景

櫻は中尊寺の門内にも咲いてゐた。麓から上らうとする坂の下の取附の所にも、一本見事なのがあつて、山中心得の條を記した禁札と一緒に、たしか「淺葱櫻」といふ札が建つてゐた。けれどもそれのみには限らない。ところどころ汽車の窓から見た櫻は、奥が暗くなるに隨つて、はつとさえを見せて咲いたのはなかつた。薄墨、鬱金、また淺葱といつたやうな、どの櫻も皆ぼつとりとして曇つて、暗い紫を帯びてゐた。雲が黒かつた爲かも知れない。

空さま
浮彫

(承塵)

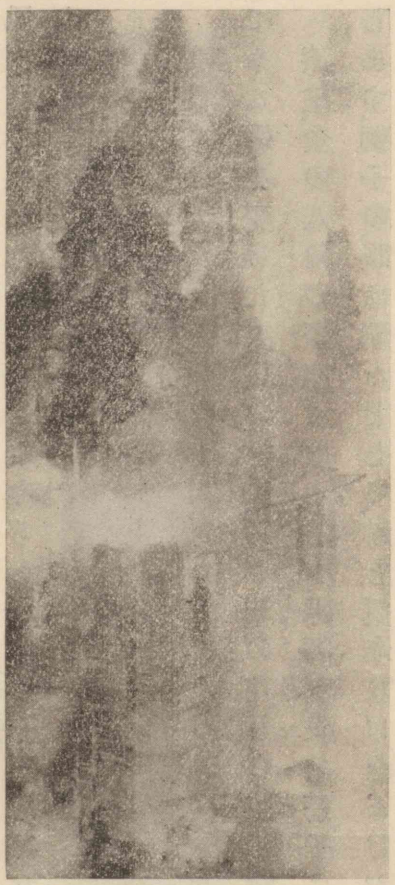
仙骨
七寶莊嚴
種々相
(鏤)

と、階の前の花片が、をりからの冷たい風にはらはらと誘はれてさつと散つて、この光堂の中を空さまにひらりと紫に舞ふかと思ふと、羽目に浮彫した孔雀の尾に、玉を刻んで緑青にさびたのが、なほ嚴かに美しい。その翼をはらはらとたいて、ちらちらと床にこぼれかゝる。やがて宙で黄金の卷柱の光を受けて、ほつと金色に翻るのを見た時は、思はず驚歎の瞳を見はつた。

床も、なげしも、柱はもとより、たゞずむ所踏む所は、黒漆の落ちた黄金である。黄金の剥げた黒漆とは思はれないで、しかも些のけばけかしい感じが起らぬ。さながら金粉の薄雲の中に立つた趣がある。我等仙骨を持たない身も、この雲はかつ踏んでも破れぬ。その雲を透かして、四方に七寶莊嚴の卷柱に對するのである。美しい虹をそのまゝ、柱にしてゑがいた十二光佛の微妙な種々相は、一つ一つ錦の絲に白露をちりばめた如く、玲瓏として珠玉の中に顯れて、清

須彌壇

五月雨の阿彌陀
光堂



(筆岬龍谷蔦)堂光の雨

く明らかに、しかも幽かな幻である。その十二光佛の周囲には、玉螺鈿を星の流れるが如く輝かして、寶相華、勝曼華が隙間もなく咲きめぐつてある。この柱が須彌壇の四隅にある。まこと天上の柱である。須彌壇は三座あつて、壇上には彌陀、觀音、勢至の三尊、二天、六地藏が安置され、壇の中には眞中に清衡、左に基衡、右に秀衡の棺が納り、ここに各一口の劔を抱き、鎮守府將軍の印を帶び、錦袍に包まれた三つの屍が、まだそのまゝに横たはつてゐるさうである。

天界一叢の雲

雛芥子の紅は美人の尻より咲いたと聞く。光堂はここに三個の英雄が結んだ金色の果なのである。

謹んで辭して、天界一叢の雲を下りた。

階を下りざまに見返ると、外圍の天井裏に蜘蛛の巢がかつて、風に軽く吹かれながらきらきらと輝くのを、不思議な塵よと見れば、一粒の金粉の落ちて輝くのであつた。

さて經藏を見よ。またいやが上に懐かしい。

羽目には天女迦陵頻迦が髣髴として舞ひつゝ、かなでつゝ、浮出てゐる。影を受けた束貫の材は、鈴と草の花との玉の螺鈿である。

漆塗金の八角の臺座には、本尊文殊師利、朱の獅子に騎しておはします。獅子の眼は爛々として、赫と眞赤な口をあけた、青い毛の部厚な横顔が見られるが、づづつと足を舉げさうな構である。右にこのくつわを取つて、ちよつと振向いて、菩薩にものをいひさうなの

爛々

(一)鳥の名

拂子 錫杖

瀧の音さくら月夜は更けにけり

鏡花

紺紙金泥

(一)平泉村。醫王山金剛王院と中慈覺大師の開基したものと傳へる。

が優闌王、左に一匣を捧げたのは善哉童子、この両側左右の背後に、淨名居士と佛陀波利とが、一は拂子を振り、一は錫杖に一軸を結んだのを肩に擔ぐやうに杖ついて立つ。ひげも、額も、目も、眉も、そのいづれも莞爾莞爾として、文殊も微笑んでまします。第一獅子が笑ふのである、獅子が。



踏筆花鏡泉

この須彌壇を左に、一架を高く設けて、ここに紺紙銀泥の一卷を半ば開いて捧げてある。見返しは金泥銀泥で、本經の圖解をゑがく。清麗巧緻で、かつ神秘である。

今ここに來てこの經を見ると、毛越寺の彼は恰も砂金を捧げることが如く、これは月光を仰ぐやうであつた。

三平の家もろっ

散佚

(最原)

架の裏に色の青白い瘦せた墨染の若い出家が一人ゐた。私の一
 禮に答へて、「お緩り御覽なさい。」
 二三の散佚はあらうが、いふまでもなく、堂の内壁にめぐらした
 八つの棚に満ちて、二代基衡のこの一切經、一代清衡の金銀泥一行
 まぜ書の一切經、並びに判官びいきの第一人者三代秀衡老雄の奉
 納した黄紙宋板の一切經が、皆黒耀の珠玉の如く漆の架に満ちて
 ゐる。一切經の全部量は、七駄片馬と稱へるのである。
 「拜見をいたしました。」
 「はい。」

と腰衣の素足で立つて、すつと經堂を出て、朴齒の高足駄で、卷袖で、
 寒くほつそりと草を行く。清らかな僧であつた。

六 をりふしの移り變り 吉田兼好

(一) 春はたゞ花
 のひとへに咲
 くのばかりは
 ののあはれは
 秋ぞまさる
 る(拾遺集)
 よみ人知らず

氣色立つ

名にこそ負へ
 れおぼつかなき
 さましたる

(二) 陰曆四月八日
 (三) 賀茂祭、四月
 の中の酉の日



兼好法師

をりふしの移り變るこそ、ものごとものごとに哀あはれなれ、ものの哀は秋こそ
 まされ」と人毎にいふめれど、それもさるものにて、今一きは心も浮
 立つものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども殊の外に春めき
 て、のどやかなる日影に、垣根の草萌出
 づる頃より、や、春深く霞みわたりて、
 花もやうやう氣色立つほどこそあれ、
 をりしも雨風うち續きて、心あわたゞ
 しく散過ぎぬ。青葉になり行くまで、よ
 ろづにたゞ心をのみぞ悩ます。花橘は

ことも立返り、こひしう思ひ出でらる。山吹の清げに、藤のおぼつ
 かなきさましたる、すべて思ひ棄てがたきこと多し。
 灌佛(二)の頃、祭(三)の頃、若葉の梢涼しげに茂り行くほどこそ、世の哀も

六 をりふしの移り變り

水鶏のたよく

蚊遣火

(一)六月晦日の大祝

人のこひしさもまされと人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月あやめふく頃、早苗とる頃、水鶏のたよくなど心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるも哀なり。六月ばらへまたをかし。棚機祭るこそ艶かしけれ。

今更にいはいにもあらず
あぢきなし
すさび
かいやり棄つべきもの
遣水

やうやう夜寒になるほど、雁鳴きてくる頃、萩の下葉色づくほど、わさ田刈干すなど、取集めたることは秋のみぞ多かる。また野分のあしたこそをかしけれ。いひ續くれば、皆源氏物語枕草子などにことふりにたれど、同じことまた今更にいはいにもあらず。思しきこといはぬは腹ふくる、わざなれば、筆に任せつ、あぢきなきすさびにて、かいやり棄つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。さて冬枯の景色こそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとままりて、霜いと白う置けるあした、遣水より烟の立つこそをかしけれ。

すさまじ

(一)十二月十九日から二十一日までの三日間、宮中で行はれた佛事。
(二)十陵八墓に幣帛を奉られた使。
やんごとなし
公事
(三)十二月晦日の鬼やらひ。

年の暮れはてて、人ごとにいそぎあへる頃ぞ、またなく哀なる。すさまじきものにして、見る人もなき月の、寒けく澄める二十日餘りの空こそ、心細きものなれ。御佛名荷前の使立つなどぞ、哀にやんごとなき。公事どもしげく、春のいそぎに取重ねて催し行はる、さまぞいみじきや。

追讎より四方拜に續くこそおもしろけれ。晦の夜いたう闇きに、松ども點して、夜半過ぐるまで、人の門たき走りありきて、何事にかあらんことごとしくの、しりて、足を空に惑ふが、曉方よりさすがに音なくなりぬるこそ、年の名残も心細けれ。亡き人のくる夜とて魂祭るわざは、この頃都にはなきを、東の方にはなほすることにてありしこそ、哀なりしか。かくて明行く空の氣色、きのふに變りたりとは見えねど、引きかへ珍しき心地ぞする。大路のさま松立てわたりして、花やかにうれしげなるこそ、また哀なれ。

徒然草

創作室あり

千世のスケッチ

藤村

七五

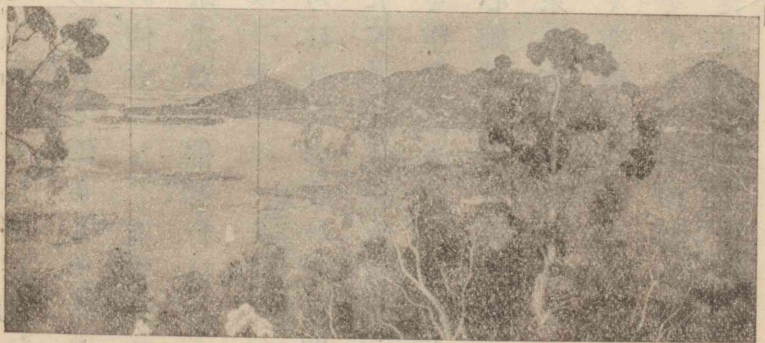
今相調

佐保姫の春の車駕

七 晩春の別離

島崎藤村

時は暮れゆく春よりぞ
 また短きはなかるらん。
 恨は友のあかれより
 さらに長きはなかるらん。
 君をおくりて花ちかき
 高樓までも来て見れば、
 みどりにまよふ鶯は
 霞むなしく鳴きかへり、
 しろき光は佐保姫の



一のそ (筆村遙田池) 春残の畔湖

海老原 子

春の車駕を照らすかな。
 これより君は行く雲と
 ともに都を立ちいでて、
 おもへば琵琶の湖の
 岸の光にまよふとき、
 ひがし膳吹の山高く、
 西には比叡、比良の峰、
 日は行きかよふ山々の
 ふかきながめを伏仰ぎ、
 いかによぐれし想をか
 沈める波にたふらん。

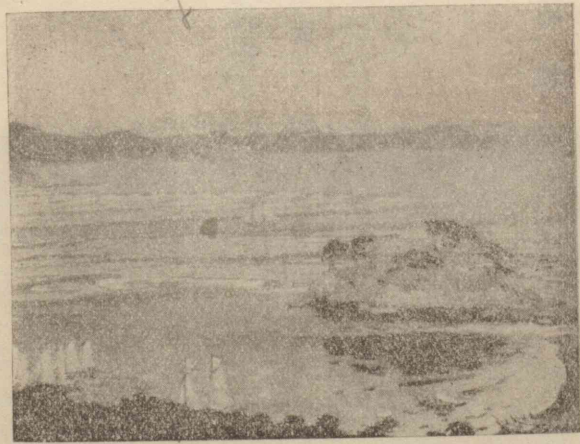


二のそ (筆村遙田池) 春残の畔湖

(一)白河法皇

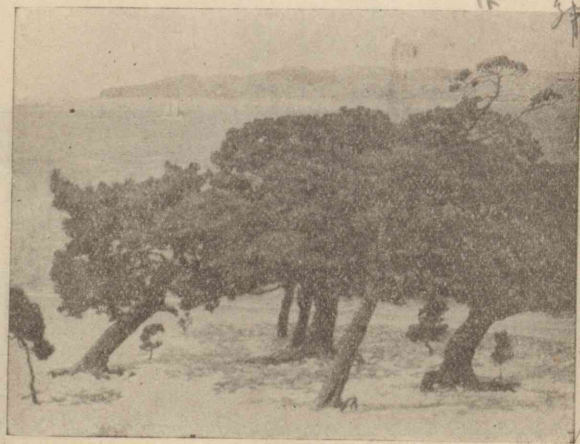
白河法皇
の御
影

ながれはむなし、法皇の
 夢はるかなる賀茂の水、
 水にうつろふ山城の
 みどりの都ゆく春の
 かすめる姿見つくして、
 畿内にせまる伊賀伊勢の
 鈴鹿の山の波とほく
 海に落つるを望む時、
 いかによろづの恨をば、
 空行く鷺に窮むらん。
 春さり行かば、青によし
 奈良の都に尋ね入り、



(筆郎八川中) 門鳴の波阿

としつき君がこひしたふ
 御堂のうちに遊ぶ時、
 ふるき藝術の花の香の
 伽藍の壁にのこりなば、
 いかにか韻を身にしめて、
 深き思にしづむらん。
 さては秋津の島が根の
 南のつばさ紀の國を
 めぐりて進む黒潮の、
 鳴門に落ちて行く所、
 あまぎは速く白き日の
 光をもらす雲裂けて、



(筆郎孟木子鹿) 濱の子舞

目にはるかなる遠海の
 波のをどるを望む時、
 いかにも胸打つ音たかく、
 君が血汐のさわぐらん、
 または名に負ふ歌枕、
 波に千とせの色映る
 明石の浦の朝ぼらけ、
 松よろづよの音にひびく
 舞子の濱のゆふまぐれ、
 もしそれ海の雲落ちて、
 淡路の島の影くらく、
 さ霧のうちに鳴きかよふ



比 良

柳女大層

浦の朝霧に

身がたれ行く

舟に上りておもしろ

源 兼実

淡路島小舟の隅

くき

知在ぬおの

イナ

千鳥の聲を聞く時は、
 いかにも浦邊にさすらひて、
 遠き昔をしのぶらん、
 げに君がたぬ山々は
 雲を停めん、浦々は
 磯にながる、白波を
 あげんとすらん、よじさらば、
 旅路遙かに野邊行かば
 野邊のひめごとと森行かば
 森のひめごとと探りもめめ
 高きに登りあめつちの
 もなかに遊び大川の



石 明

朽ちせぬ琴

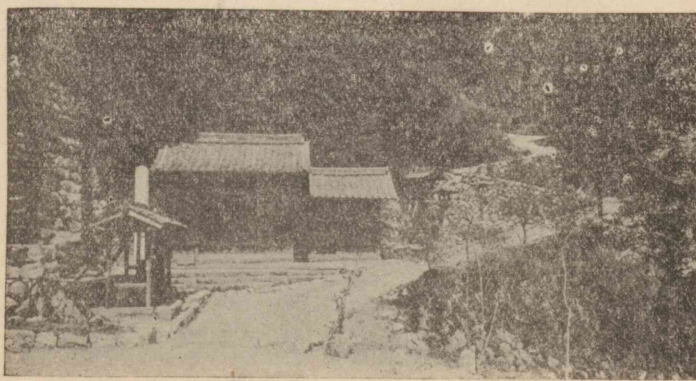
コトシヤイ
伊后秋

ながれをきはめ、山々の
神をもよほはひ、谷々の
鬼をもおこし、歌人の
魂をも速く返しつゝ、
清しき聲をうちあげて、
朽ちせぬ琴をかきならせ。

さらば名残は盡きずとも、
たもとを分つゆふまぐれ、
見よ影ふかき欄干に、

空見

けむりをふくむ藤の花。
北行く雁はおほ空の
霞に沈み鳴きかへりけり。



(現権鹿鈴) 山 鹿 鈴

彩なす雲も愁へつゝ、
君を送るに似たりけり。
あゝ、いつかまた相逢うて
もとの契をあたくめん。
梅も櫻も散りはてて、
すでに柳は深みどり、
人はあかねど、ゆく春を
いつまでここに留むべき。
われに惜しむな、家づとの
一枝の筆の花の色香を。

— 藤村詩集 —

(一)文學士。現東京女子高等師範學校教授。静岡縣の人。

國文

八 節供と家庭

倉橋惣三

女の子の爲に三月の雛祭があり、五月端午の節供を男の子の爲にあてて、日本全國津々浦々まで、國中舉つて子供の爲にお祝をするといふことは、誠に趣の深い詩的な年中行事で、子供の爲に大層幸福なことであります。

雛祭も、端午の節供も、子供の爲の祝日ですから、大人の弄ぶ骨董的な性質のものでもなければ、風流といふやうな意味のものでもなく、一家が専ら子供の爲に喜ぶといふことが中心にならなければなりません。その歴史的由來がたとひどうであらうとも、新しい意味に於て、わが國に存在する一年に一日の子供日は、さういふやうにありたいのであります。

すべて子供の爲の喜とか祝とかいふやうなことは、家庭的性質のものでなければなりません。かのクリスマスなども、わが國

骨董的
ものすきの意

社會的傾向
社會の全體に
適するやうな
かたむき。

愛の光

愛情の裏

徹頭徹尾

どこからどこ
までも

家族意識

家族といふ氣
持

(幟)

情味
あちはひ。

では子供の爲に、家庭内で喜び楽しむといふよりも、社會的傾向を帯びて居りますが、本來は家庭内に於て、一家だんらん、暖かい愛の光に融合ふといふことでなければならぬのであります。さういふ意味から見ると、端午の節供なども徹頭徹尾、家庭的性質のもので、その中には自ら家族意識或は家庭感情といふものが伴なつて、子供心に家庭とか、家族とかいふ優しい情緒を養ふ爲に有効なのであります。例へば、家内中の人たちが嬉々として武者人形を飾つて下さるとか、或は父や兄が長い竿を立てて鯉のぼりをつり上げて下さるとか、一方には母や姉が一所懸命になつて柏餅をこしらへて下さる、その柏餅を包む柏の葉も、裏の山からみんな取つて來たものであり、柏餅につくる米の粉は、祖母さんが數日前から、せつせと挽臼で挽いて下すつたのだといふやうなところに、いふにいはれぬ家庭的な、そして、教育的な情味を含んであるのであります。

お祝が家庭的であるといふことは、祖先を敬つて自分の一家を愛する感じを子供に起させるのに誠に都合がよい。三月の雛祭にしても同じことですが、五月節供の武者人形でも、古くからわが家に傳はつてゐる人形は、土藏から出して來て飾るといふやうなところに、なん等の説明も講釋もせずとも、わが家の古い歴史を尊ぶ感じを與へることができるのであります。

今日の如き時代にあつては、子供にかういふ方面の「わが家」といふ感じが缺けてゐますし、また平素かうした感じを養はせるといふことは、甚だむづかしいのであります。かういふ感じを持つといふことは、子供の堅實な情緒を養ふ上に甚だ有効なことで、かつ必要なことでもあります。けれども餘り祖先崇拜的な嚴肅な形で子供に強ひることは、その割に効がないのであります。が、かういふ特別な一日の愉快な氣分の中に、わが家の歴史といふやうな感じを與へることができるとすれば、この一日を大い

堅實
たしかでしつ
かりしてゐる
こと。

に利用したいもので、この意味からいへば、新しい人形や飾物を澤山買つてやるよりも、古いものを保存して用ひることが、望ましいのであります。

古いものを保存して用ひれば、お節供が年々繰返されて行くことによつて、子供は自分の生まれた時のいはゆる初節供からの人形が並べられるのを見て、別に説明せずとも、最も愉快な、そして、具體的な自分の生立ちの感じを味はふことができます。それが爲に、子供は自分の小さい時のことを考へるといふやうな感情的なことはなく、また考へさせるやうではいけません。さつぱりした明るい氣持の中に、自分の生まれた時から、親たちがかうして愛して下すつたといふ感じを持つものであります。

前に述べた意味を一步進めると、國家といふ感じを、極めてあどけない子供らしい意味に於て、子供の心に入れることができます。鎧よろひとか、冑かぶととか、太刀たちとか、武者人形とか、五月節供の飾物につ

具體的な
實物に據つて
まよまつた。

いて、今日の時代では、それを知識的に子供に教へる必要はないかも知れぬが、かういふものほど、極めて自然的に、國家といふ感じを起させるものはない。鎧、冑、武者人形などに對する子供の心持は、極めて具體的な感情に充ちて來て、一種堅實な情緒を養ふことができるのであります。

さういふ意味からして、飾物には昔風のもものが好ましいと思ひます。餘り現實的、寫實的意味のものよりも、やはり昔のもものがよいと思ひます。必ずしも牛若や、辨慶や、金太郎ばかりを選べといふ意味でなく、さういふものによつて、習慣的に起されてゐるこの日の或感^{あはれ}を保存したのであります。特にこの日に限つて、かういふ教育を與へねばならぬといふやうな子供に強ひる意味でなしに、この日の價値を認めねばならぬと思ひます。

それから、別段なんといふわけあひとか理窟とかいふのではありませんが、この日の與へるところの一種獨得な氣分といふ

現實的
現に實際ある
通りの
寫實的
寫實的
實物をうつし
たやうな。

剛健
しつかりして
風しないこと。
五月晴
五月頃の空の
快晴。

ものを理解しまた保存する必要があります。

桃の花咲く長閑な春の一日に、女の子の爲に雛の節供があり、新緑爽やかな初夏の一日に、男の子の爲に端午の節供があるといふところに、いふにいはいはれぬ季節のおもしろみがあります。更に細かく考へて見ますれば、雛祭のどこまでも女性的なのに引換へ、端午の節供は飽くまでも男性的で、一方の草餅、櫻餅には優しい風情があります。一方の柏餅や鋭い太刀のやうな菖蒲の葉を用ひる上には、なんとなく男らしい剛健な氣分があります。殊に雛祭は室内的であります。端午の節供は、戶外に高い鯉のぼりを吹流して、子供にはゆる五月晴の快活な空を仰がせるといふところに、かうした氣分上の感化のあるのを見のがしてはなりません。

九 松下禪尼と最明寺入道 兼 好法師

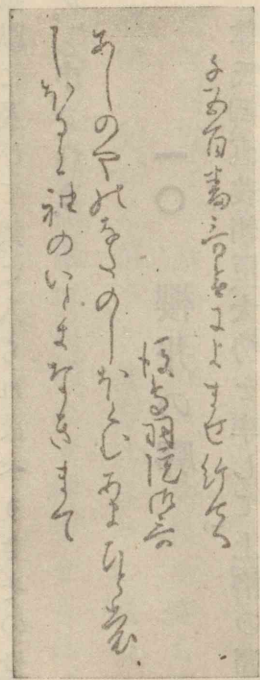
一 松下禪尼

相模守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守をいれ申さるゝことありけるに、すゝけたる明障子のやぶればかりを、禪尼手づから小刀して切りまはしつゝ、張られければ、兄の城介義景、その目のけいめいして候ひけるが、賜はりてなにがし男に張らせ候はん。さやうのことに心得たるものに候。と申されければ、その男、尼が細工によもまさりはべらじ。とて、なほ一間づつ張られけるを、義景、皆を張りかへ候はんは、遙かにたやすく候ふべし。斑に候ふも見苦しくや。と重ねて申されければ、尼も後はさわさわと張りかへんと思へども、けふばかりはわざとかくてあるべきなり。ものは破れたる所ばかりを修理して用ふることぞと、若き人に見ならはせて、心づけん

けいめい

爲なり。と申されける、いと有難かりけり。世を治むる道、儉約を本とす。女性なれども、聖人の心に通へり。天下をたもつほどの人を子にてもたれける、誠にたゞ人にはあらざりけるとぞ。

二 最明寺入道



傳兼好筆蹟

平宣時朝臣老の
のち昔語に、最明寺
入道或宵の間によ
ばるゝことありし
に、やがてと申しな

千五百番歌
會によませ
給ける
後鳥羽院
御歌
あしのやの
なむあまひ
くむしほ
ともほいと
に袖のいと
まなきまで

がら、直垂のなくてとかくせしほどに、また使來りて、直垂なんどのさふらはぬにや。夜なればことやうなりとも疾く。とありしかば、なえたる直垂、うちちのまゝにて罷りたりしに、銚子に土器取添へてもて出でて、この酒をひとりたうべんがさうざうしければ申し

九 松下禪尼と最明寺入道

紙燭

つるなり。肴こそなければ、人はしづまりぬらん。さりぬべきものやあるといづくまでも求め給へ。」とありしかば、紙燭さして、くまぐまを求めしほどに、臺所の棚に、小土器に味噌の少しつきたるを見出でて、「これぞ求め得てさふらふ。」と申し、かば、事足りなるとて、心よく數獻に及びて、興に入られはべりき。その世にはかくこそはべりしか。」と申されき。

—徒然草—

一〇 櫻井の驛

尊氏卿直義朝臣、大勢を率して、上洛の間、要害の地に於て防ぎ戦はん爲に、兵庫に引退きぬる由、義貞朝臣早馬を參らせて、内裏に奏聞ありければ、主上大いに御騒ぎあつて、楠木判官正成を召されて、「急ぎ兵庫に罷り下り、義貞に力を合はせて合戦すべし。」と仰せられければ、正成畏まつて奏しけるは、尊氏卿すでに筑紫九國の勢を率

(一)後醍醐天皇の延元元年(一九九六年)五月、九州の大軍を率ゐて東上した。

機に乗る
驅合はす

決定

搦手

了簡

とてもかくても
勅答

して上洛候ふなれば、定めて勢は雲霞の如くにぞ候ふらん。身方の疲れたる小勢を以て、敵の機に乗つたる大勢に驅合はせて、尋常の如くに合戦をいたし候はば、身方決定打負け候ひなんと覺え候ふなれば、新田殿をもたゞ京都へ召し候ひて、前の如く山門へ臨幸なり候ふべし。正成も河内に罷り下り候うて、畿内の勢を以て河尻を差塞ぎ、両方より京都を攻めて、兵糧を疲らかし候ふほどならば、敵は次第に疲れて落下り、身方は日々に随つて馳集り候ふべし。その時に當つて、新田殿は山門より押寄せられ、正成は搦手にて攻上り候はば、朝敵を一戦に滅さんことありぬと覺え候。新田殿も定めてこの了簡候ひなん。たゞ路次にて一軍もせざらんは、無下にいふがひなく人の思はんずるところを耻ぢて、兵庫に支へられたりと覺え候。合戦はとてもかくても、始終の勝こそ肝要にて候へ。よくよく遠慮を廻らされて、公議を定めらるべきにて候。」と勅答せられけり。

僉議
左大辨參議
節度使
延元元年正月、
尊氏の上洛を
さけて行幸な
された。

鉄鉞

されば列座の諸卿いづれも、誠に軍旅のことは兵に譲られよ。と僉議ありけるに、重ねて坊門宰相清忠申されけるは、正成が申すところもその謂ありと雖も、征伐の爲に差下されたる節度使、未だ戦を爲さざる前に帝都を棄てて、一年の内に二度まで山門へ臨幸ならんこと、かつは帝位の輕きに似、または官軍の道を失ふところなり。たとひ尊氏筑紫勢を率して上洛すとも、去年東八個國を順へて上りし時の勢にはよも過ぎじ。凡そ戦の初より敵軍敗北の時に至るまで、身方小勢なりと雖も、毎度大敵を攻靡けずといふことなし。これ全く武略の勝れたるところにはあらず。たゞ聖運の天にかなへる故なり。さればたゞ戦を帝都の外に決して、敵を鉄鉞の下に滅さんこと、なんの仔細かあるべきなれば、たゞ時をかへず、楠木罷り下るべし。とぞ仰せ出されける。

正成、この上はさのみ異議を申すに及ばず。とて、五月十六日に都

庭訓

を立ちて、五百餘騎にて兵庫へぞ下りける。正成これを最後の合戦と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふやうありとて、櫻井の宿より河内へ返し遣すとて、庭訓を遺しけるは、



楠公父子訣別の圖
(菊池容齋筆)

これをなぐ。その子獅子の氣分あれば、教へざるに宙より跳ねかへりて、死なずといへり。況や汝すでに十歳に餘りぬ。一言耳にとゞまらば、わが教誠まことに違ふことなかれ。今度の合戦天下の安否やすやすと思ふ間、

獅子子

を産ん

で三日

を経る

時、數千

丈の石

壁より

忠烈

若黨

(一)支那古代の弓の名。百歩はなれた柳の葉を射たといふ。百中したといふ。

(二)漢の高祖の臣。高祖が項羽に圍まれた時、身代りとなつてこれれを助けた人。

(三)秦の穆公に仕へた人。

(四)百里奚の子。

良弼

一揆

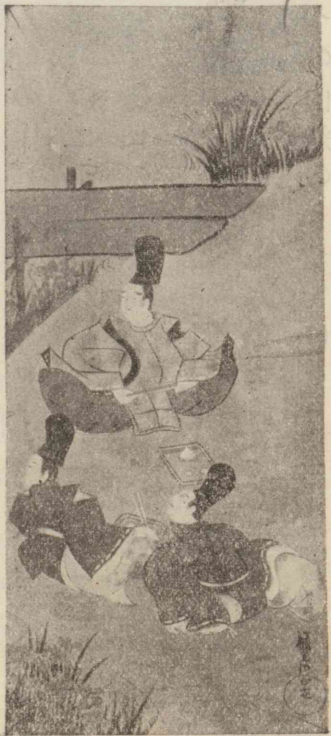
今生にて汝が顔を見んこと、これを限りと思ふなり。正成すでに討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の代に成りなんとおぼえたり。さりとも一旦の身命を助からん爲に、多年の忠烈を失うて降人に出づることあるべからず。一族若黨の一人も死にのこりてあらんほどは、金剛山の邊に引籠つて、敵寄せ來らば命を養由が矢さきに懸けて、義を紀信が忠に比すべし。これぞ汝が第一の孝行ならんずる。と泣く泣く申し含めて、各東西へ別れにけり。

昔の百里奚は穆公晋の國を伐ちし時戰の利なからんことを鑑て、その將孟明視に向かつて今を限りの別を悲しみ、今の楠木判官は、敵軍都の西に近づくと聞きしより、國必ず滅びんことを愁ひて、その子正行を留めて、なき後までの義を勸む。彼は異國の良弼、これ正行はわが朝の忠臣、千載を隔つと雖も、前聖後聖一揆にして、有難かりし賢佐なり。

太平記

一一 東下り

昔、男ありけり。その男、身を益なきものに思ひなして、京にはあら



八橋(尾形光琳筆)

じ、東の方にすむべき國もとめにとて行きけり。もとより友とする人、一人二人して行きけり。道知れる人もなくて、惑ひ行きけり。三河國八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくも手なれば、橋を八つ渡せるによりてなん八橋とはいひける。その澤の邊の木の蔭におりゐて、餉くひけり。その澤にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て或人のいはく、

ちりり

たれは、高かしの男、あやま

夢のみのり

君を見よと

唯仁親王、

あかひの

まのん

月の東

かき

いの

あさ

二 東下り

くつぎ
水

(一)安倍郡と志太郡との境

「かきつばたといふ五文字を句の上にするて、旅の心を詠め。」といひければ、詠める、

唐衣きつ、馴れにしつましあれば

はるばる來ぬる旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、皆人、餉の上に涙落してほとびにけり。行き行きて駿河國に至りぬ。宇津の山に至りて、わが入らんとする道は、いと暗う細きにつた、かづらは茂り、もの心細く、すゞろなるめを見ることと思ふに、修行者おひたり、かゝる道にはいかでかおはする。といふに見れば、見し人なりけり。京にその人の御許にとて、文書きてつく。

駿河なるうつつの山邊のうつつにも

夢にも人に逢はぬなりけり

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降りたり。

時しらぬ山はふじの嶺いつとてか

鹽尻



(不退蔵寺蔵) 在原業平

かのこまだらに雪の降るらん

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらんほどして、なりは鹽尻のやうになんありける。なほ行き行きて、武藏國と下總國とのなかにいと大きな河あり、それを角田河といふ。その河の邊に群れるて思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守はや舟に乗れ。日も暮れなん。といふに、乗りて渡らんとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の嘴と脚とあかき、しぎの大ききなる、水の上に遊びつ、魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人え知らず。渡守に問ひければ、「これなん都鳥」といふを聞きて、

洋風に日比宮
私風には
古代わり上野
軽快に聲を抜
草内

名にしおはばいざこと問はん都鳥
わが思ふ人はありやなしやと
伊勢物語

一 上野と浅草 齋藤 緑 雨

上野は築きなされたる公園なり、陰氣なる神の庭なり、貴族的なり。浅草は埋めたてられたる公園なり、陽氣なる佛の宿なり、平民的なり。上野は靴に石段を登るべく、浅草は雪踏に敷石を行くべし。上野に多きは背廣なり。浅草に多きは三尺帯なり。
上野は樹木の公園なり、茶を喫するの公園なり。幽邃なるが故に即ち獨賞的なり。浅草は屋舎の公園なり、酒を呼ぶの公園なり。熱鬧なるが故に即ち共樂的なり。天然の色は上野に見るべく、人為の聲は浅草に聞くべし。前者はぶらつきなり。後者はおしあひなり。

熱鬧



筆洋耕田柴 朝の寺草浅

高野天公園。比較

上野

貴族的
自然的
詩的
目的
獨貴的

淺草

平民的
人為的
藝術的
俗的
口公園
共學的

厭世
樂天

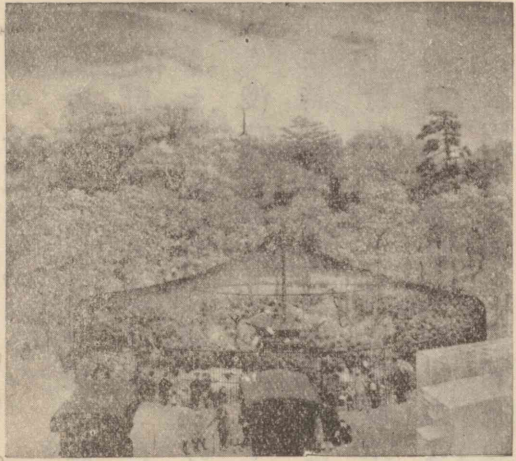
閑寂
喧囂

上野は目の公園なり、眺望の公園なり。淺草は口の公園なり、飲食の公園なり。更に思ふに、上野は行きどまりの公園なり。淺草は通りぬけの公園なり。

上野にありては神樂も厭世なり。淺草にありては念佛も樂天なり。上野の夕べの鐘は頻りに歸るを促し、淺草の朝の鐘はひとへに來るを迎ふ。上野に遊ぶものはけふの課程のなほ了せられざるが如く、淺草に遊ぶものはあすの業務のはや廢せられたるが如し。上野は詩吟の公園なり。淺草は鼻唄の公園なり。

上野は黙していはず。淺草は語りてやまず。上野は詩の典雅なるものなり。淺草は文の俗惡なるものなり。上野は大氣の公園なり、沈靜の公園なり、やがて閑寂の公園なり。淺草は塵埃の公園なり、浮動の公園なり、やがて喧囂の公園なり。上野は悠揚なり。淺草は狼藉なり。上野はあつらへの公園なり、あ

amusing
winning



(筆仙鹿良奈) 園物動の野

すわりの公園なり、記念像の公園なり。浅草は仕入の公園なり、たちかはりの公園なり、のぞき眼鏡の公園なり。紙入と目的とをもたざるも上野には入るべく、墓口と手段上とをもたざれば浅草には入るべからず。

上野は濕れる公園なり、涙の公園なり。浅草は乾ける公園なり、笑の公園なり。一は動物園に晝も猩々の叫びやすらん。一は水族館に夜もあかえひの踊りやすらん。

上野は風流なり、死せる風流なり、古を見るべし。浅草は趣味なり、生ける趣味なり、今を見るべし。上野に鞭影の絶ゆることあれども、浅草に夜香の盡くることなし。世は

(赤鰐)

赤鰐

る

擱筆

(一)現在の東京市有電氣鐵道の前身。明治十四年。明治十七年頃まであった。緑は紅は車臺の色。

奔騰

進歩とぞいふなる。發達とぞいふなる。なほ大いに開化とぞいふなる。

以上は諸種の點より開化の公園に二様あるを示したるのみ。比較の始なり、判断の終りにあらず。敢へて擱筆の便宜を得んが爲に、ここに無用の一語を添へんか。上野行は緑ならざるべからず。浅草行は紅ならざるべからず。これを顛倒したるは無智なる馬車鐵道會社の過失なり。

一三 喬木

萬造寺 齊

見よ、すばらしいえのきの喬木、
高く、美しく、堂々とまばゆい日光の驟雨を浴み、
新生の慨に身ぶるひしつゝ、五月の空に聳え立つ。
彼の胸は地球の胸より空へ奔騰する大噴水、

椿 櫻 秋 楓 桐

天蓋

天蓋の如く緑の珠玉珊々として滴り落ちる。

彼の姿を望む時私は偉人の生涯を思ふ。

一つの民族の母胎より生まれ、

その民族の過去の努力のすべての成果を攝取しつゝ、

その民族の憧憬と理想と、欲求と、苦惱とをおのれの一身

に體現しつゝ、

時代を指導する偉人の如く、

豊饒な土壤の母胎より、

深い自然の根源より、

絶えず榮養を吸収して鬱蒼と繁茂しつゝ、

高く美しく堂々と彼は五月の野に君臨する。

君臨す

豊饒

ヒラギ

星霜

見よ、彼の節こぶだらけの幹のおもてに

深く刻まれた幾星霜の奮闘と努力と、忍苦との痕跡を。

しかもあらゆる困難を排し、

すべての障碍にうち克ちつゝ、

成長の力を失ふことなく、

絶えず更新し脱落して、

無限な進展の一路をたどる

彼の姿の端麗さ

彼の力の旺盛さ

彼は大地を裝飾するもの。

彼は世界を莊嚴にするもの。

まことに彼は試鍊と苦惱との闇の中より希望と光明と

を生出すもの。

試鍊

旺盛

更新
脱落

従容として
うから

努力と精進との不撓の精神。

おのれの性をつくして生きつゝ、
従容として天命を待つかの曠世の偉人のうからだ。

私は聞いた、冬の真夜中に

膚をつんざく烈風の激しい突撃に對抗する彼の勇まし
い怒號の聲を。

私は見た、雪の日の午後、

降積む雪の重壓を昂然として反撥しつゝ、空にそば立つ
彼の姿を。

あゝ、いたましい迫害と孤獨と敵意との中であつて、
(さうして、それがすべての偉人の運命なのだ。)
雪を凌ぎ嵐と戦ひ、

長い血みどろの奮闘の後再び楽しい五月を迎へた。

彼の緑のみづみづしさ。

彼の勝利の華々しさ。

彼の榮光の輝かしさ。

彼によつて五月は楽しく、

世界は希望と光明とに充ちる。

彼の梢の不斷のそよぎは、

疲れたものへの慰藉のことば、

鼓舞と激勵との音楽だ。

悩めるものはここに來つて

彼の下蔭に休むがいい、

彼の言葉をきくがいい、

彼のいのちに觸れるがいい。

元保
平尾
高野
御月
新田

(一)群馬縣碓氷郡
(二)碓氷郡と長野縣北佐久郡との境

寸馬豆人

見よ、すばらしいえのきの喬木、
高く美しく、堂々と、
傾く午後の日ざしの中に今燦爛と光り輝く。

一四 信濃路の旅

正岡子規

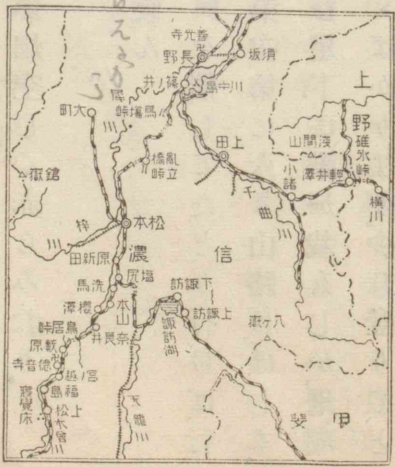
上野より汽車にて横川^(一)に行き、馬車にて碓氷峠^(二)を越ゆ。鳥の聲耳もとに落ちて、見上ぐれば千仞の絶壁、百尺の老樹、聳え聳えて天も高からず。樵夫の唄足下に起つて、見おるせば、つた、かづらを傳ひて渡るべき谷間に、腥き風さつと吹きどよめきて、萬山自ら震動す。遙かに來し方を見かへるに、山また山峨々として、路いづくにかある。寸馬豆人といへるは彼かとはかり疑はれて、つゞら折いく重の峰をわたりきて

あはひ

雲間にひくき山もとの里

日もや、暮れか、れば、四方濛々として、山とも知らず、海とも知らず。駈上る駒の蹄に踏散らす雲霧のあはひを見れば、一步の外は削りたてたる嶮崖の底も幽かにて、いと怖し。登れども登れども窮る所を知らず。山益、高く、雲愈、低し。

見あぐれば信濃に續く若葉かな
輕井澤はさすがに夏なほ寒く、隙間漏る淺間おろしに、一重の旅衣、見果てぬ夢を護るに難かり。例ならず疾く起出でて窓を開けば、幾重の山嶺、屏風を繞らして、草のみ生茂りたれば、その色、染めたらんよりも麗し。
山々は萌葱淺葱やほとゝぎす



(一)天台宗。長野市の北端。阿彌陀如来をまつる。

浅間は雲に隠れて煙もいづくにたち迷ふらんと思はる。汽車をカ驅りて善光寺に詣で、それより川中島を過ぐ。古戰場はいづくのほどとも知らねど、山と山とに圍まれて、犀川のめぐるあたりにやあらん、河の水はいたく瘦せて、ほとりの麥畑空しく赤らみたり。

日はくれぬ雨はふりきぬ旅衣
袂かたしきいづくにか寝ん

水かき
香りせぬ
水
もろの形

(二)長野縣更級郡。猿ヶ馬場峠といふ。

次の日雨晴る。路に立てる芭蕉塚に興を催してたどり行けば、行手遙かに山重れり。野の狭う尖りて、次第次第に入る山路ははしく、弱足に登る馬場峠、さても苦しやと休む足下に、誰が栽ゑしか、珊瑚なす覆盆子、旅人も採らねばや、こぼるゝばかりなめ。少し登りて、とある樹蔭のよしず茶屋に憩へば、主婦のもてなしぶり、谷水を四五町の麓に汲みてもてくる汗の滴り、情を汲む一口に浮世の腸は洗はれたり。一樹の蔭一河の流とや、ひじりの教も時にあうてこそ有

つとめて

難けれ。

この夜は亂橋といふ怪しの小村に足をとむ。隣室の雑談に夢覺されて、つとめてここを立出づれば、はや爪先あがりの立峠。旅の若衆と見て取つて、馬子が馬に乗れとのすゝめ。有難や乗りて見れば、旅ほど氣樂なるものはなし。昨日の馬場峠はなぜに苦しみし。路の邊に咲く白き花を何ぞと問へば、これなんうつぎと申す。といふ。いとうれしくて、

むら消えし山の白雪来て見れば
駒のあがきにゆらぐ卵の花

峠にて馬を下る。鶯の時ならぬ音に驚かされて、

鶯や野を見おろせば早苗取

松本にて晝餉した、む。早く木曾路に入らんことのみ急がれて、原新田まで三里の道を馬車にちゝめて洗馬までたどりつき、饅頭

(一)東筑摩郡。松本市の南方。
(二)原新田の南約二里。

(一)洗馬の南一里餘。
 (二)西筑摩郡。本山の南一里。うつゝをぬかす。
 桃源

(三)櫻澤の南二里餘。
 (四)奈良井の南廿五町。藪原へ二

にすぎ腹を肥して、本山の玉木屋に宿る。
 本山を出で櫻澤を過ぐれば、ここぞ木曾の山入。山のけしき水の有様は、や尋常ならぬ。けはひにうつゝをぬかし、桃源遠からずと獨り勇めば、鳥の聲も耳にたちて珍し。

奈良井の茶屋に憩ひて、ぐみはなきか。と問へば、ぐみといふものは知りはず。珊瑚實ならば背戸にあり。といふ。山中に珊瑚、さてもいぶかしと裏に廻れば、やはりぐみなり。あるじの女房深切に採りてくれたり。峽中第一の難所といふ鳥居峠は、若葉の風に夢を薫らせて、瘦馬の力におもしろう攀登る。

馬の背や風吹きこぼす椎の花
 頂にて馬を下り、つくづく四方を見おろせば、古木鬱蒼、谷深くして、樵夫の小徑微かに隠見す。珍しく晴れわたりたる空の青嵐を踏まへながら山を下れば、藪原の驛なり。或家に立寄りてお六櫛を求

(一)藪原の南方二里五町。

慇懃

(二)壽永年間の建立。

(三)木曾義仲。

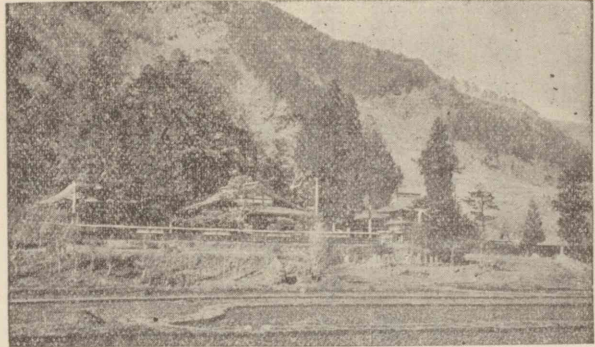
(四)宮越城址。木曾義仲の本城。一名山吹城。

(五)德音院殿。義山宣公の略。義仲の法名。

む。このほとりよりぞ木曾川に沿うて下るなる。白雲をあやどる山脈は愈、迫りて、かぶせかゝらん勢怖しく、奥山の雪を解かして清らかなる水は谷を縫うて、その響凄じ。深き淵のたゞ中に、大いなる岩の一つ突出でたる上に、年ふりたる松の枝おもしろく、龍木やあらんと思はれたるもをかし。宮越の村はづれにたゞずむほどに、いと古代めきたる翁の釣竿を擔ぎたるが、畫の中よりぞ現れ出でたる。笠をぬぎて慇懃に德音寺への道を問ふ。翁のいふ、さても優しの若者や。旭將軍のなき跡を弔はんとてや、ここまでは來給へる。ここに茂れる夏木立は八幡の御社なり。かしこの山の上こそ昔の城の址なれ。このわたりの畑も、つはものどもの住みし夢の名残なるものを、今は桑の木ばかりぞ秀でたる。と、一つ一つに指さす。さるるに古をしのぶ言葉のはし、この翁、謠ならばかき消すやうに失せぬべし。日照山德音寺に行きて、木曾宣公の碑の石摺一枚を求む。この前の

雨のよみ所
徳音寺
吉野

(一)福島と上松との間



(所廟の)仲義左 樓鐘兼門山右 堂本央中)寺音徳

淵を山吹が淵、巴が淵と名づくとかや、福島を今宵の旅枕と定む。木曾第一の繁昌なりとぞ。

翌日朝大雨。待てども晴間なし。傘を購ひ來りて書流す句に、

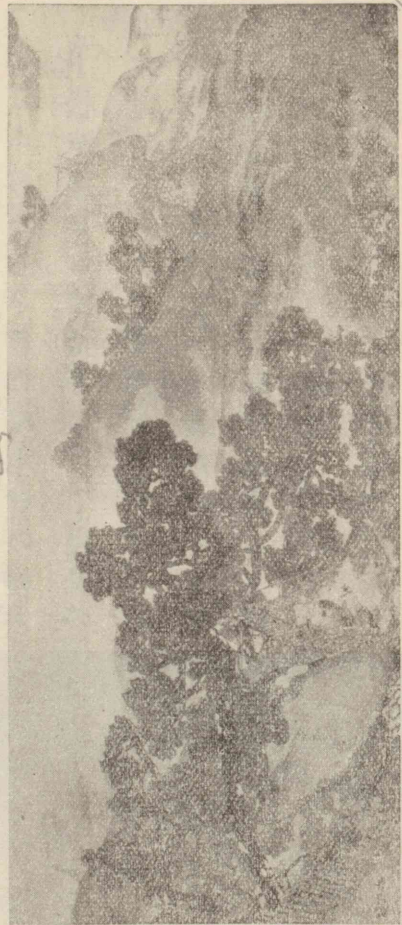
をりからの木曾の旅路を五月雨

旅亭を出づれば、雨小やみになりぬ。このひまにと急げば、雨の脚に追ひつかれ、木蔭に憩へば、また降りやむ。とにかくと雨になぶられながら、行き行きて棧に着きたり。見る目危き兩岸の岩の、數十丈の高さに削りなしたるさま、一雙の屏風を押し立てたるが如し。神代の昔よりむし重りたる苔の、美しう青みわたれるあはひあはひに、何げなく咲出でたる杜鵑花の麗しさ。狩野派にやあらん、

狩野派の道

土佐

(一)松尾芭蕉の「とよかけはしつたかづらの句碑」



(筆觀靜島綱) 道 棧

土佐畫にやあらん。下をのぞけば、五月雨に水かさ増したる川の勢、渦まく波に雲を流して、突きては割れ、當りては碎くる響、大磐石も動く心地して、うしろの茶屋に入り、床几に腰うちかけて目を瞑ぐに、大地の動き、しばしはやまはやま、ず蕉翁の石碑を拜みて、

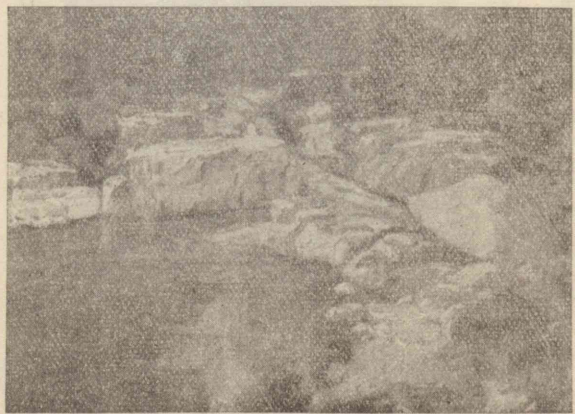
て、さややかなる橋の虹の如き上を渡るに、わが身も空中に浮かぶかと疑はれ、足の裏ひやひやと覚えて、強くもえ踏まず。通り來し方を見わたせば、ここぞ棧のあとと思しきも、今は石を積固めれば、

固より往來の煩もなく、たゞつたかづらの力がましくはひまつはれるばかりぞ、古の面影なるべき。

昔たれ雲のゆききの跡つけて

わたしそめけん木曾の棧

上松を過ぐれば、ほどもなく寢覺の里なり。寺に至りて案内を乞へば、小僧絶壁のきりぎはに立ち、遙かの上を指さして、「ここは浦島太郎が龍宮より歸りて後に、釣を垂れし跡なり。川のため、中に松の生ひたる大岩を寢覺の床岩その上の祠を浦島堂とは申すなり。その傍に押立てたる岩を屏風岩、疊み上げたるを疊岩といふ。象岩はその鼻長く、獅子岩はその口廣し。この外、腰掛岩、まないた岩、釜岩、硯



(筆博田吉) 床の覺寢

(組)

岩、烏帽子岩など申すなり。と、いと殊勝氣にぞしやべりける。誠やここは天然の庭園にて、松青く、水清く、いづこの工匠か削り成しけん、岩石は峨々として高く低く、或は凹みて渦をなし、或は逼りて瀧をなす。いかさま仙人の住所とも覺えてたふとし。

— 獺祭書屋俳話 —

自修文

一五 坐り

山本有三

去年の夏は、大部分輕井澤の先の千ヶ瀧で暮した。そこから輕井澤へ行くには、是非とも一旦沓掛驛に出なくつてはならない。ところが沓掛と輕井澤との間は、街道と鐵道線路とが殆ど平行してゐるので、その間を自動車で通ると、よく汽車と競走することがある。或日自動車で輕井澤へ出かけたところが、偶然うしろから上りの列車が來て、追越して行つた。運轉手はそれを見ると、

(一)劇作家。文學士。本名山本勇造。栃木縣の人。明治二十年生。
(二)長野縣北佐久郡。
(三)輕井澤の西一里半。

競走意識
競走をしよう
といふ心。

Heavy.
へビーをかけ
るとは、最大
速力を出すこ
と。
危く
すんでのこと

急に競走意識をわき立たせて、ぐつと速力を早めた。それで暫くの間は、両方が殆どすれすれになつて進行してゐた。

ところが、往來を向ふから荷車が一臺とぼとぼとやつて來た。街道といつても田舎の道であるから、荷車と自由にすれ違ふだけの廣さはない。いきほひこちらには荷車の通り過ぎるまで速力を緩めないわけにはいかなかつた。思はぬ障害物の爲に可なり汽車に追越されてしまつたが、荷車をやり過すと、いきなり運轉手は猛烈なへビーをかけた。私は危く車の中に倒れようとした。「ばかに速力を出すね。何哩だい。」

私はよろけながらたづねた。

「五十哩です。」

運轉手は正面を見つめたまゝ、吐出すやうにいつた。しかし、その返事は前から來ないで、車のうしろの方で微かに響いた。

「そんなに出しちや危険だよ。汽車と競走なんかしたつて、はじ

まらないぢやないか。あたりまへの速力にし給へ。」

運轉手は何か答へたらしいが、五十哩の急速力は、それをどこかへ吹飛ばしてしまつた。

私は車の中に下つてゐる帶皮にぎゆつとつかまつてゐたが、それでも幾度かはふり出されさうになつた。その瞬間、嘗て譯したことのあるシュニツレルの短篇「死人に口なし」の一場面が、ちらつと頭に閃いた。それは自動車ではないが、馬丁がやけに馬を走らせた爲に、車體を顛覆させた一節である。

しかし、幸に何事もなかつた。新輕井澤の近衛公の別邸の前あたりに來た時には、こちらはまだ可なり汽車をぬいてゐた。そこまでくると、運轉手は勝誇つたやうな態度で、速力を徐々に緩めながら、平常の速力にかへした。私はほつとした。それまでは車體の激動もたまらなかつたが、それ以上私を脅したものは、空氣の稀薄であつた。私は屢息苦しさを感じたくらゐだつた。一時間五

Schmitzer.
オーストリア
の小説家、劇
作家（西曆一
八六六年）

(二) 輕井澤の摩
里。

もの數では
ないでもない。
なんでもない。

dem dount

十哩といふ速力は、随分烈しいものだと思つた。
ところがその後、天文のことを書いた通俗な書物を讀んでおたら、地球はなんでも一秒間に三十哩とかの急速度で、太陽のまはりをぐるぐる廻つてゐるのだといふ記事が目についた。すると、かたつといふ間に、私たちはもう三十哩も走つてゐるわけである。一時間なら十萬哩ものすばらしい速力になる。これに比べたら、一時間五十哩くらゐな速力は、もの數ではない。それなのに私たちは、自動車を飛ばせると動搖や息苦しさをひどく感じながら、その何千倍もの速さで走つてゐる地球だと、そんな不安を絶対に感じないのは妙である。地球が急速度で廻轉してゐる爲に、目まひがしたとか、息切がしたとかいふものは、たゞの一人もありはしない。いや、それどころか、實際に於ては、地球が動いてゐるといふことさへ、私たちは意識したことがない。専門の學者がさういふから、はあ、さういふものかな。と思ふだけで、あゝ、今

天動説
地球が宇宙の
中心にあつて、
日月星辰は皆
地球をめぐつ
てまはるとい
ふ昔の説。地
動説の對。

dount
dem

地球が廻轉してゐる。などと氣づくものは、誰ひとりないはずだ。今日では教育を受けた人なら、最早天動説を信ずるものはあるまいけれども、たゞ見た目の上からいふと、やつぱり太陽や月が動いて、地球は動かないものやうにしか感じられない。非常に速く動くものの方が、却つて私たちに感じないで、それよりは遙かに遙かに遅いものの方が、すばらしく速く動くやうに思はれるのは、實際不思議な現象といはなければならぬ。
この頃の子供は餘り獨樂を廻さないやうだが、私は小さい時分よく獨樂を弄んだ。そして、獨樂が非常によく廻つて、まるで動かないやうに見える時、私たちはそれを、獨樂が坐る。といつた。行儀が悪く踊を踊つたり、冠をふつたりしないで、じつと不動の姿勢をとるところから、さういふ言葉が生まれたのだらう。いつ誰がいひだしたのか知らないが、おもしろい言葉だと思ふ。
しかし、坐るといふことは動かないことではない。一見動かな

いやうに見えるけれども、實は最も烈しく動いてゐることである。最も烈しく廻轉すればこそ、獨樂は始めて坐るのであつて、坐りは活動の絶頂である。

どんなにすばらしく活動してゐるやうに見えても、動きが見えるといふことは、力が弱い證據である。動いてゐるといふことは、確かに動いてゐることであつて、まだ「坐り」に達しない状態である。そして、廻轉が弱いほど動きは一層よく見える。

一時間五十哩の速力といへば、私たちには非常な疾走であるが、しかし、或意味からいへば、一時間たつた五十哩許の速力だつたからこそ動きが目立つて、烈しい動搖や息苦しさを覺えたのではあるまいか。地球が動かないやうに思はれるのは、地球が實にすばらしい勢で廻轉してゐるからである。一時間に十萬哩もの速力になると、獨樂が坐るやうに地球が坐つてゐて、私たちには却つて少しの動きも感じられないのだと思ふ。若しそれが

$6x^2 - 23x + 1 = x^2 +$
 $7x^2 - 23x =$
 $5x^2 - 23x =$

求心力
 或物が曲線運
 動をなす時、運
 動の中心の方
 に向かつて引
 けられる力

一生云々
 一生十分に活
 動しない人々
 があるとの意

禪門
 禪宗の意

わかるやうになつたら、その時は地球の力が非常に弱くなつた時である。いや、そんな時代が來たら、生物は地球の廻轉を感ずる前に、とうに地上から失はれてゐるであらう。月に生物がゐないのは、廻轉する速力が遅い爲に、求心力が激減して、空気を發散してしまふこともその一因であるといふ。

ところが動いてゐるものでなくつては活動してゐるのではないと思つてゐる人がある。

投げられたまゝでころころと轉がつてしまふものや、少し廻轉したと思ふ間もなく倒れてしまふ獨樂。

心の動くのは力の張りつめてゐない時である。

一生坐らないでしまふ人々。

俳句や歌の方には、動いてゐる句、動かない句、坐りといふことがある。

禪門で坐ることを大事なこととしてゐるのは、うなづかれる。

$(2x-1)(3x-10)$ $6x^2 - 2x - 3x + 10$

しかし、心棒を土の中に突つ刺して、獨樂が坐つてゐると思ふ人があればもの笑だ。
 坐らうとして坐られるものではない。力がはちきれ勢が昂じて自ら坐るのである。
 獨樂が坐ることを子供たちはまた「澄む」といつてゐる。
 まことに坐ることは澄むことである。 — 途 上 —

(一)山本有三著小品集。大正十五年新潮社發行。

一六 百花譜

大町桂月

郊原一路、満目すべて薄なり。夕陽沈まんとして、雲色哀しみ、西風冷やかにして、酸たる鳥聲秋の恨を語る。馬のいなゝく聲まづ聞え、小唄聞えて近づくを見れば、若き農夫馬背にあり。手綱は鞍にあづけたるまゝにて馬の自ら歩むは、熟せる路にや。鳥飛びつくして四面寥廓たり。ふと願れば、招く尾花の末に、一團の大月明らかなり。

寥廓

點塵
局に對す
子を下す

雀の聲滑かなる冬の日和、日影暖かに圓窓を射て、火鉢の火も消えかゝれり。室淨うして點塵なし。床の間の俗氣なき畫幅の下、水仙三つ四つ露を帯びたり。老人二人靜かに局に對して子を下す聲、時に丁々として響く。

茅屋
機杼

桃花數株、茅屋を圍みて鶏聲午なり。はねつるべ動かずして一犬門外に眠り、屋内よりは鄙びたる歌の聲、機杼の聲と共に洩れ來る。

水榭
人籟

一泓の池水、半ばこれ蓮花。白や紅や影を水に落して、水に花あり。健鯉時に躍りて、波文岸に及ぶ。水榭深く鎖して、人籟なし。曉煙垂柳をこめて、日未だ昇らず。

流鶯
流るとしもなき

流るとしもなき里川、底は泥なれども水は澄みたり。こなたは小徑行人なく、かなたに椿自ら垣になりて、多く花を着けたり。流鶯時に一聲、思ひがけずも大輪の花ぼとりと水に落ちて、水暫くは交をなす。

櫻の影、
暗雲、
腹、
香、
今、
（紅、
浪、
遊、
麥、
荊、

荊莽 遊絲 麥浪

村はづれに岐路ありて、問はんとするに人なし。馬頭觀世音の石像、頑としてものいはず。側に生出でたる幾莖のをみなへし、なよなよとして風にもだゆ。侶伴なくて詩を思ひつゝ、たどる山路、到る所櫻花多し。春風一陣、空に晴雪を散らし、地に綾の筵を敷く。

池畔の掛茶屋、少女欄により、手をうちて鯉を呼ぶ。稚兒立ちて麩を投ぐ。棚上の藤花累々としてさがりて、人の頭に及ばんとす。麥浪に連なる一面の菜花、菜花や黄、麥浪や緑、滿地皆色あり。行人絶えて遊絲長閑に懸り、一双の胡蝶追逐し、去つて行く所を知らず。夏の日暑く、山路嶮しく、喘ぎ喘ぎ上るに、渴を催して堪難き時、水音聞えていとうれしく、荊莽を排してこれに就けば、急湍清玉をほとばしらす。一掬、二掬、三掬、漸く蘇生の思をなして、ふと目を注げば、苔滑かなる巖の上に、百合の花危げに立てり。折らんと欲して折る

(整)



(筆塘翠瀨長) 露

に忍びず。立別れんとすれば、滋き水のしぶきに、花涙を含むが如し。白鷺の小首傾けて立てる洲邊、蘆花雪を吹く。夕陽傾きて、柳影長き堤の上、往きかふ人なし。巨蟹はひいでて泡を吐きつゝ、はさみを舉げて空を挟む。馬に食ません料とにや、利鎌を朝日にきらめかして、露ながら刈りたる草の一束、背に載せて歸り行く田舎少女。知りてか、知らずてか、その草の中に桔梗一枝まじれり。鸚鷯語りつくして日暮れんとす。人待てどもいたらず。蕭々たる細雨、庭の秋海棠にそゞぐ。

— 春草秋草 —

一七 春の句 夏の句

梅一輪一輪ほどのあたゝかさ
驚の身をさかさまに初音かな
たこ買つて子心ぞ憂き雨つゞき
春の水とところどころに見ゆるかな

嵐 雪
其 角
召 波
鬼 買

蓬萊の松の根の松

其角筆蹟

清水の上から出たり春の月
矢橋乗る嫁よ娘よ春の風
あけぼのや董かたぶく土龍
つばくらや小袖を洗ふ橋の下

許 六
太 祇
凡 兆
紫 白

蓬萊の松に
たてはや會
根の松
其角

凡 許
其 角
大 草

蛇谷山とて
忍

さみたれや
ある夜竊に
松の月
夢太

雉子羽うつて琴の緒きれしゆふべかな
雲雀より上にやすらふ峠かな
有明の油どのこるほとゝぎす
ほとゝぎす啼くや木曾路のおそ櫻
夕風や水青鷺のすねをうづ

星 布
芭 蕉
宗 因
素 山
蕪 村

さみたれや
ある夜竊に
松の月
夢太

夢太筆蹟

小づまより針ひねり出す袷かな
しづかさや岩にしみ入る蟬の聲
涼しさよ夕立ながら入る日影
唇に墨つく兒の涼みかな
つゝ立つて帆になる袖や涼舟

几 董
芭 蕉
去 來
千 那
丈 草

井戸掘の涸世に出たる暑さかな
 草笛の上手つくしぬ夏の月
 たうたうと瀧の落ちこむ茂りかな
 也 有
 月 居
 士 朗

一八 をさな兒

小林 一茶

こぞの夏竹植うる日の頃、うき節しげきうき世に生まれたる娘、
 ものに敏かれとて、名をさるとよぶ。ことし誕生日祝ふころほひよ
 り、手うち手うちあは、天窓てんでん、かぶりかぶりふりながら、同
 じき子供の風車といふもの持てるを、しきりにほしがりてむづか
 れば、とみに取らせけるに、やがてむしやむしやしやぶつて棄て、露
 ほどの執念なく、直ちにほかのものに心うつりて、そこらにある茶
 碗をうち破りつゝ、それも直ちに倦みて、障子の薄紙をめりめりむ
 しるに、よくした。よくした。と褒むれば、誠と思ひ、けらけらと笑ひて、

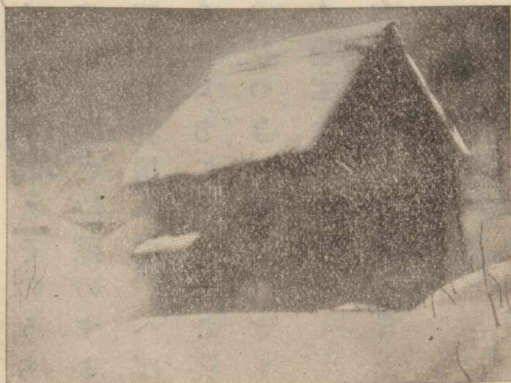
(五月十三日の
 は竹酔日として
 この日に竹を
 移植すれば枯
 れないといふ)

竹 五月十三日
 竹 五月十三日
 竹 五月十三日

ひたむしりにむしりぬ。心のうち一點の塵もなく、名月のきらきら
 しく清く見ゆれば、なかなか心に心の皺も伸しぬ。

また人の來りて「わんわんはどこに。」と
 いへば犬に指さし「かあかあは。」と問へば
 鳥に指さすさま、口もとより爪先まで愛
 敬こぼれて愛らしく、春の初草に胡蝶の
 戯るゝよりも優しくなん覺ゆる。

をりから門に月さしていと涼しく、外
 にわらはべの踊の聲のすれば、直ちに物
 投棄てて、片のざりにゐざり出でて、聲を
 あげ、手眞似して、うれしげなるを見るに
 つけ、いつしか彼をも振分髪のたけになして、踊らせたらんには、二
 十五菩薩の管絃よりも遙かに勝りて興あるわざならんと、わが身



(筆行素玉兒) 家の茶 一

振分髪

小鹿の角のつ
かの間

に積る老を忘れて、憂さをなん晴しける。

かく日すがら、小鹿の角のつかの間も、手足を動かさずといふことなくて、遊び疲るればにや、朝は日のたくるまで眠る。そのうちばかり母は飯炊ぎ、そこら掃きかたづけて、やがて閨に泣聲のするを目の覺むる相圖と定め、手がしこくも抱起して、乳房あてがへば、すはすはと吸ひながら、胸板のあたりをうちたゞきて、にこにこ笑顔をつくるに、母は長き胎内の苦みも、日々のむつきの穢はしきもち忘れて、掌の中の玉と撫でさすりて、一人喜ぶなりけり。

のみのあと數へながらに添乳かな

——茶全集——

川柳點 金子元臣

川柳點は實に剃刀の如きか。觸るもの皆斷れ、近づくもの皆傷つく。語句簡勁にして直ちに人の肺腑に入り、諷刺骨に徹り、滑稽お

諷刺
おとがひ(頤)
を解く

(襁褓)

(蛋)

カウキ
川柳

櫻快

佛の

突梯

應接に違あら
ず

寸にして珍

昔年の川柳

女阿へを

物に

元日は

戸を

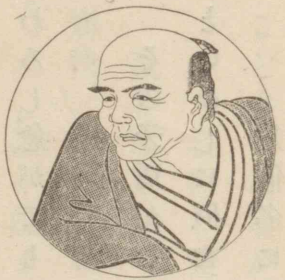
青い

か

昨日

小豆

華最



柳川代初

三を擧げて、いひ試みん。

あがるなといはぬばかりの帳を出し

無筆者年賀に來て、御慶帳の記名に困り、さば來ぬ分にして下され。といひしこと、昔の笑話に見えたり。今は帳の代りに名刺受を立

竹の子は盗まれてから番がつき

關に出す。これも、あがるなといはぬばかりなり。よくあることなり。後の祭にもあれ、番を附くるは附けざるに勝れり。聞きやうによりては、諷刺ともなり、訓誡ともなるなり。

川柳點

(一)宋の文章家。
名は軾。西曆
一〇三六年—
一一〇一年)

(二)「いそがずば
ぬれざらまし
を旅人のあ
とより晴る
野路のむらさ
め」
座頭

稽

酒 紙 滑 柳

特 徴
新 刊
落 下

おさへれば薄はなせばきりぎりす

形容の妙を曲盡せり。蘇東坡が「餓蛟取渴虎」と書きしをいみじき手がらのやうに驚ける人若しこの句を見れば、何とかいはん

本降になつて出てゆく雨やどり

道灌の「いそがずばぬれざらましを」の歌と一對の巧語。急ぎてもわろし。急がでもわろし。とにかく考へものなり。

提燈が消えて座頭に手を引かれ

その矛盾がをかしきなり。塙檢校が「さてさて目あきは不自由な」といひしに似たり。

片假名に四角な文字は手を引かれ

漢文に捨假名、反點の左右にうるさく附きまとへるさま、譬へ得て妙。昔のヲコト點ならんには、四角な文字に灸をする。ともいはずいふべし。

手紙には狸臺には鯉を載せ

手紙を見て肝を潰し、臺を見て胸撫でおろすらんをかしさよ。近來は中等教育を終へたるものの文章にも、狐を馬に乗せたる類のこと多し。あながちにこの狸をのみ笑ひ難くや。

名物を食ふが無筆の旅日記

腹のふくる、日記かな。食ふより外に能なき人間を罵倒し得て痛快。

泣く泣くもよい方を取る形見わけ

人情の弱點を穿ち過ぎて、餘りに酷なる心地す。かの赤穂の城渡の際、お金配分に高割を唱へし小野九太夫は、その露骨なるものか。かくの如く、川柳點は尋常茶飯のできごとをとらへて、よく滑稽化するのみならず、また最も眞面目なるべき故事、傳説、史實等を題目として、その縦横自在なる口吻を弄せり。

(一)本名大野九郎
兵衛。
尋常茶飯ので
きごと

口吻を弄す

(一)信濃の戸隠神社。手力雄神を祀る。

附會

(一) 戸隠も神樂のあひだひげをぬき
岩戸の細目に開くまでは、用のなき戸隠明神なるを思ふべし。毛
抜にひげぬくひま人の所作を、神代に附會したる、働あり。

御紀行拜見に能因は當惑し

なまじひに名歌を詠みて、苦勞をまうけたるは能因なり。天日に
焦して顔だけは黒めたれど、紀行までは手が届かずやありけん、も
のにそのさたなし。作者のつけ目はここなり。但し袋草紙に、一度に
於ては實か八十島の記を書けり。とあり。いつも室内旅行家にては
あらざりけらし。

(三) 忠盛の高名の場を犬がなめ

抱きとめたるは油坊主なるを思ふべし。わざと聯想の一階を飛
越して、高名の場を嘗めたりといへる滑稽突梯、まことに及び易か
らず。

(三)平清盛の父。仁平三年(一一八一年)歿。年五十八。

(二)四卷。藤原清輔の著した歌學書。

(一)猪俣太。早太とも書く。源頼政の臣。
(二)源平盛衰記のこと。

(剽輕)

(三)曾我五郎のこと。

馱馬

氣轉

(四)源左衛門當世。謡曲鉢の木に出てある。

(五)神奈川縣鎌倉郡。越えなづむ

その暗さ(一)隼太櫻に衝きあたり

(二) 盛衰記の頼政鶴を射る條に、黒雲とは見たれども、天はまことに
暗し。いづくを射るべしと、矢所定かならず。とあり。乃ち郎等隼太が
左近の櫻に鼻衝きあててまごまごする(三)場の喜劇を案出し來れ
るなり。作者はいかなるへうきんものぞ。

(三) 時致は鞭をかじつて息をつぎ

兄祐成が急を救はんとて、遂に百姓の馱馬を奪ひて大磯に驅け
つくるは、曾我の物語中、出色の快談なり。これを圖にして大根の鞭
を添へたるは、畫工の氣轉なり。せきにせいたる息やすめにその大
根を嚙らせたるは、この作者の氣轉なり。

(四) 佐野の馬戸塚の坂で二度ころび

(五) 戸塚の坂は鎌倉入の一難所。元來乗力なき源左が瘦馬、さぞや越
えなづみしならん。ざるを、二度まで轉びたりと誇張したるに、大い

あはれ
しりし
あはれ

ととと

(一)小野氏。平安時代の書家、三蹟の一。
湊合の妙

(二)支那周の武王の父。

(三)呂尚といふ。文王や、武王を輔けて天下を一統させた人。

邂逅

(四)太政大臣平清盛。入道して浄海といつた。

神拜

なる可笑味を生ず。

芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり

湊合の妙を見る。主題の蛙をいはで、突然にしたてたるところに、

一種のおもしろみあるなり。

釣れますかなどと文王をばに寄り

さすがの聖人文王と、奇傑太公望との邂逅も、話の口火を切るには、極めて平凡ならざるを得ず。たゞ、などとの語、胸に一物ある趣を、
状し來りて、幾多の波瀾あるを覺ゆ。

二〇 小松内府 その一

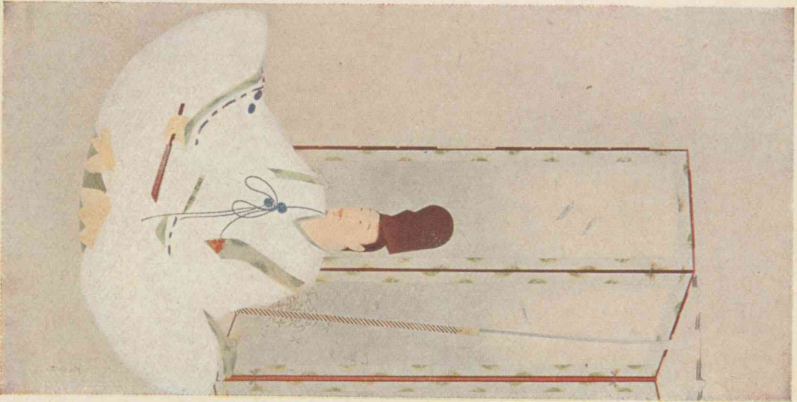
太政の入道はかやうに人々數多縛め置きて、もなほ心ゆかずや
思はれけん、すでに赤地の錦の直垂に、黒絲をどしの腹卷の白金物
打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙

イラツク
有
な
な

家
な
な
な



筆恒有部照



盛清守藝安



日本三忠人

榎木正成

平重盛

木蘭

十

ち

と

と

と

(一)筑後守平貞能
清盛の腹心。

(二)清盛の叔父忠
正。

(三)崇徳上皇。

(四)重仁親王。

(五)清盛の父忠盛。

(六)鳥羽法皇。

(七)藤原信賴。

(八)源義朝。

(九)藤原經宗。

(一〇)藤原惟方。

つて、嚴島大明神よりうつ、に賜はられたりける銀の蛭卷したる
小長刀、常の枕を放たず立てられたりしを脇に挟み、中門の廊にぞ
出でられたる。大方その氣色ゆゝしくぞ見えし、貞能を召す。

筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋をどしの鎧着て、御前に畏まつ

てぞ候ひける。入道宣ひけるは、いかに貞能、このこといかが思ふぞ。

保元に平右馬助をはじめとして、一門半ば過ぎて新院の御方に参

りにき。一宮の御事は故刑部の卿殿の養君にてましまししかば、旁

見放ち参らせ難かりしかども、故院の御遺誠に任せて、御方にて先

をかけたたりき。これ一つの奉公次に平治元年十二月、信賴、義朝が謀

叛の時、院内を取り奉つて大内に立籠り、天下暗闇となつたりしに

も、入道随分身を捨てて兇徒を追落し、經宗、惟方をめし縛むるに至

るまで、君の御爲にすでに命を失はんとすることたびたびに及ぶ。

されば人何と申すとも、いかでかこの一門をば七代までは思し召

(一)藤原成親。
(二)藤原師光。入道して西光と
いつた。

讒奏

(三)後白河法皇

北面

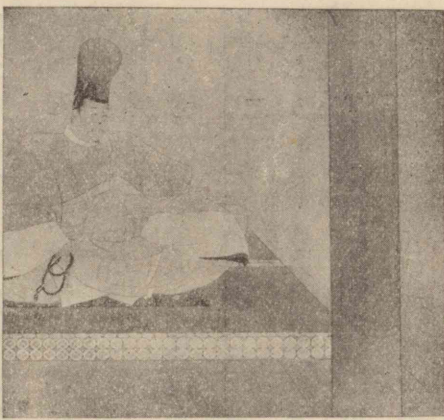
(四)平重盛の邸

し棄てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづらもの、西光と申す下賤の不当人が申すことに君のつかせ給ひて、動もすればこの一門滅さるべき由の御結構こそ然るべからね。の後も讒奏するものあらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎮めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ移し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし参らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて北面のものどもが中より、矢をも一つ射んずらん。その用意せよと侍どもに觸るべし。大方は入道院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ。着脊長取出せ。こそ宣ひけれ。

主馬の判官盛國急ぎ小松殿へ馳参つて、世は早かう候と申しければ、大臣聞きもあへ給はず、嗚呼はや成親の卿の首の刎ねられたんな。と宣へば、その儀にては候はねども、入道殿の御着脊長を召さ

卿相の公邸

(一)清盛の邸



(筆月契池菊) 盛重平

れ候ふ上は、侍どもも皆うち立つて、たゞ今院の御所法住寺殿へ寄せんとこそ出立ち候ひけれ。暫く世を鎮めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし参らせうとは候へども、内々は鎮西の方へ流し参らせんとこそ議せられ候ひつれ。と申しければ、大臣、何によりてたゞ今さることのおはすべきとは思はれけれども、今朝の禪門の氣色さるもの狂ほしきこともやおはすらんとて、急ぎ車を飛ばせて、西八條殿へぞおはしたる。

門前にて車より下り、門の内へさし入りて見給ふに、入道腹巻を着給ふ上、一門の卿相雲客數十人、各いろいろの直垂に思ひ思ひの

面はゆう

鑑着て、中門の廊に二行に着せられたり。その外、諸國の受領、衛府、諸司などは縁にゐるこぼれ庭にもひしと並みあたり。旗竿ども引側め引側め、馬の腹帯を固め、冑の緒を締め、たゞ今皆うち立たんずる氣色どもなるに、小松殿、烏帽子直垂に大紋の指貫のそば取つて、さやめき入り給へば、事の外にぞ見えられける。

入道伏目になつて、あはれ例の内府が世をへうずるやうにふるまふものかな。大きに諫めばやと思はれけれども、さすが子ながらも、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を亂らず、禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹巻を着て向かはんこと、さすが面はゆう耻づかしうや思はれけん、障子を少し引立て、腹巻の上素絹の衣をあわて着に着給ひたりけるが、胸板の金物の少し外れて見えけるを隠さうと、頻りに衣の胸を引違へ引違へぞし給ひける。大臣は舍弟宗盛の卿の座上に着き給ふ。入道宣ひ出さるゝこと

五常
仁義礼
智信

さやめく

舍弟宗盛

もなく、大臣もまた申し上げらるゝ旨もなし。

二 小松内府 その二

や、あつて入道宣ひけるは、あの成親の卿が謀叛はことの數にも候はず、一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎮めんほど、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし参らせんと思ふはいかに。と宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はらはらとぞ泣かれける。入道、さていかにやいかに。とあきれ給へば、や、あつて大臣涙をおさへて、この仰承り候ふに、御運ははや末になりぬと覺え候。人運命の傾かんとては、必ず悪事を思ひ立ち候ふなり。また御有様を見参らせ候ふに、更に現とも覺え候はず。さすがわが朝は邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫國の主として、天兒屋根尊の御末、朝の政を掌らせ給ひしよりこの方、

粟散の境

破戒無慙

蓮府 槐門 進止

(一)今の安徽省を流れて淮水に合する川。耳を洗つたのは許由の故事。(二)伯夷と叔齊。

太政大臣の官に至る人の甲冑をよるふこと、禮儀を背くにあらざるや。就中御出家の御身なり。法衣を脱捨てて忽ちに甲冑をよるひ、弓箭を帶しまし、まさんこと、内には破戒無慙の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にも背き候ひならず。かたがた恐ある申事にて候へども、心の底に旨趣を残すべきにも候はず。まづ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩、これなり。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下王地に非ずといふことなし。さればかの潁川の水に耳を洗ひ、首陽山にわらびを折りし賢人も、勅命の背き難き禮儀をば存知すところ承れ。いかにいはんや、先祖にも未だ聞かざつし太政大臣を極めさせ給ふ。いはゆる重盛が無才愚暗の身を以て蓮府、槐門の位に至る。加之國郡半ばは一門の所領となつて、田園悉く一家の進止たり。これ希代の朝恩にあらずや。今これ等の莫大の御恩を思し召し忘れさせ給ひて、みたりがは

傍若無人

佛陀の冥慮

しく法皇を傾け参らせ給はんこと、天照大神、正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんぞ。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。この一門が代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎮めしことは無雙の忠なれども、その賞に誇ることは傍若無人とも申しつべし。然れども當家の運命未だ盡きざるによりて、事すでに露れ候ひぬ。その上仰せあはせらる。成親の卿を召置かれぬる上は、たとひ君いかなる不思議を思し召し立たせ給ふとも、何の恐か候ふべき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈奉公の忠勤を盡し、民の爲には益撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加護にあづかつて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明、佛陀感應あらば、君も思し召し直すこと、なか候はざるべき。これは尤も君の御理にて候へば、かなはざらんまでも、院中を守護し参らせ候ふべし。その故は、重盛はじめ叙爵より今大臣大將に

一入再入

至るまで、しかしながら君の御恩ならずといふことなし。この恩の重きことを思へば、千顆萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案ずれば、一入再入の紅にもなほ過ぎたらん。然らば院中に参り籠り候ふべし。悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷廬八萬の頂よりもなほ高き父の恩忽ちに忘れんとす。痛ましきかな、不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲にはすでに不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これ谷れり。是非いかにも辨へ難し。申し受くる所詮は、たゞ重盛が首を召され候へ。その故は、院参の御供をも仕るべからず、また院中をも守護し参らすべからず。

富貴といひ、榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁極めさせ給ひぬれば、御運の盡きんこと難かるべきに非ず。富貴の家には、祿位重疊せり、再び實なる木は、その根必ず傷むと見えて候。心細くこそ候へ。いつまでか命生きて亂れん世をも見候ふべき。たゞ末代に生を

直衣

(一)源賴義の長子、音楽に
弟義光は笙の名人であつた。
欽慕
おもひしたふこと。
(二)源賴義及び義家、安倍賴時及びその子貞任と宗任とを討つた戦。(一七四四年)一七四五年
(三)源義家が清原家衡及び武衛を討つた戦。(一七四五年)一七四七年
缺筆
従事したらくこと。

享けて、かゝる憂目に逢ひ候ふ重盛が果報のほどこそ拙う候へ。ただ今も侍一人に仰せ付けられ、御壺の中へ引出されて、重盛が頭を刎ねられんことは、いと易いほどの御事にこそ候はんずらめ。これを各聞き給へ。して、直衣の袖も絞るばかりにかき口説き、さめざめと泣き給へば、その座に並み給へる平家一門の人々、皆袖をぞぬらされる。

二二 武士の風流

(一) 八幡太郎義家の勿來、關外の風流は、詩歌に詠ぜられ、畫圖に入つて、人の知つた事蹟である。弟の義光といひ、兄の義家といひ、武人として音楽に、文學に、その趣味の高かつたのは、後の武士をして愈欽慕措く能はざらしめた所以であらう。眞に日本武士の典型であつたといつてよろしい。前九年、後三年、邊土の戦に鞅掌し

ふく風をなこ
 そ なるに地名
 の勿來とく
 るなどの意を
 かけたのであ
 る。みちもせに散
 る。路もせまいほ
 ど一面に散る。
 典雅
 ひんよくみや
 びやかなこと
 (一)後白河法皇の
 院宜によつて
 藤原俊成が撰
 じた歌集
 (二)天正五年上杉
 謙信(不識庵)
 が能登七尾城
 を攻めたをり
 に詠んだもの
 (三)學者。天永六
 年(一七七一
 年)歿。年七十
 一。
 赤心を人の腹
 中に置く
 ま心を以て人
 に接する
 (四)平安時代の末
 にできた書

た身の、勿來關外に馬を控へて、
 ふう風をなこそその關とおもへども
 みちもせに散る山ざくらかな
 何等の典雅ぞ。何等の雅懷ぞ。これは勅撰の千載集に載つた名歌
 である。能州の陣頭に明月を詠じた不識庵謙信と、前後一對とも
 いふべきである。
 大江匡房が惜しいかな好漢兵法を知らず。といつたのを聞いて、
 直ちにこれについて學んだといふ話も、貞任滅亡の後、その弟
 の宗任を家來として、赤心を人の腹中に置いた話も、皆その寛仁
 大度の英雄たることを證明するのである。或家に圍碁を試みて
 居ると、賊が入つた。八幡殿の御座ぞ。といつた聲を聞いて、賊は皆
 刀を捨てて縛についたといふことが古事談に見えて居る。當時
 名聲の盛であつたこともこれでわかる。單に武勇一點張でそれ
 だけの名聲は得られるものではない。温雅春のやうな徳風の人

古來の傳説を
 集めた六卷物。
 征夷大將軍
 上古蝦夷の叛
 亂を討つた爲に
 置かれた職。
 (一)後白河天皇の
 第四子。三條
 宮とも高倉宮
 とも稱する。
 (二)深山の櫻の木
 他、冬の間は
 に見えて區別
 にながなかつた
 が、春が來り
 花が咲いて始
 めて櫻である
 と知られた。
 (三)治承四年のこ
 と。
 扇の芝
 扇形をした芝
 生。平等院の
 境内にある。
 (四)自分は世にも
 埋木同様の身
 と花の咲くこと
 のなかつたこと
 の哀なまことに
 哀なまことに

を感化させる趣があつたに違ひない。後の征夷大將軍が皆八幡
 公の子孫であつたことも、その由來の偶然でないことがわかる。
 平氏全盛の世、以仁王の令旨を奉じて源氏復興の旗揚をした
 源三位頼政、或時深山花といふ御題を賜はつて、
 深山木のその梢とも見えざりし
 さくらは花にあらはれにけり
 あはれこの源三位功名の念は急であつたが、時世は未だ彼に
 幸せず、宇治橋の一戦に脆くもうち敗れて、扇の芝で腹かき切つ
 て死んだ。その時の辭世に
 埋木の花咲くこともなかりしに
 みのなるはてぞあはれなりける
 平家の公達には風流のすさびのあつた人が多かつた中に、最
 も名高いのは薩摩守忠度である。日比は五條の三位俊成卿を歌
 の師としてゐたが、平家都落の途中から侍五六騎と取つて返し、

後の十念
後生の爲に南
無阿彌陀佛の
六字の名號を
十度となへる
こと。
(籠)

入つたが、薄手であつた。取つておさへて首をかゝうとするとこ
ろへ、六彌太の家來が飛んで來て、薩摩守の右の臂を打落した。薩
摩守今はかうよと、六彌太を六尺許取つて投げ、靜かに後の十念
稱へて、遂に討死したのである。えびらに結びつけた文に、旅宿の
花といふ題で、

行きくれて木の下蔭を宿とせば

はなや今宵のあるじならまし

とあつたので、薩摩守の最期と知つたのである。

二三 畫題としての源實朝 佐々木信綱

扇風器の風の柔かに涼しい食堂を出ると、午後の日光は緑の芝
生にまぶしく輝いてゐる。高くまた低く、海の音が絶えず小松原を
越して響いてくる。自分等は小松原の中の砂道を踏んで、砂山の上

室南
の
草
葉
の
影

(一) 神奈川県鎌倉
町にあるホテ
ル。
(二) 葉山の近くに
ある。

子
れ
の
影
降
る
草
葉

品さだめ

に登つた。そこには海濱院で設けてある廣い露臺があつて、眼の下
には稻村が崎と長者が崎とを左右の境とした青海原が、蓆のやう
に敷きわたされてゐる。けふの東道の主人は、現代有數な美術品蒐
集家で、また鑑賞家である。客は知人として相識れることを余が喜
の二つとしてゐる畫家である。この二人と、他の一人の客たる余と、
三人相對して語り合つた。

談話は主として美術の品さだめで、余は初は傍聽者であつたが、
畫家が、この鎌倉の海に對して思ひ浮かべられるのは、實朝の生涯
である。若し實朝を畫題として選ぶとしたら、どういふ所がふさは
しからうか。といひだしてからは、自分は寧ろ説明者となつた。

自分の思ふところによれば、實朝はわが國の歴史上多く類例を
見ない複雑な一人格である。彼には祖先已來の血を受けた雄々し
い武士的素質があつたことは否まれぬ。しかも一方に、その教養上

外戚

過渡時代

Hamlet

作悲劇一ハム

レックストン

人公。デンマ

ークの王子。

閱歴

(Denmark)

(丁抹)

靈腕

なし得て来た閑雅な生と生得の聰明とは、確かに貴公子たる彼の人格に於ける著しい特色をなしてゐた。さうして、かゝる性格を以て平生絶えず外戚の壓迫に苦しんで、その雄心を以ても明智を以ても如何ともなし得ず、不安不平のうち自ら沈痛憂鬱の性を養ひ、眞個悲劇の主人公たる性格をなし得たといふべきで、まさしく平安文雅の時代から鎌倉の初期に至る過渡時代といふ特殊な時代の生んだ黒い花であつた。彼の人と爲りを思ふ毎に、いつも聯想されるのはハムレットである。東西國情も違ひ、境遇も閱歴も違ふが、わが鎌倉の薄倅將軍には、どこかその性情にデンマークの王子と似通つた所があつたに違ひないとは、常に自分の感じてゐた點である。

かやうな人物であるから、敢へて傳記のいづこを選ぶまでもなく、畫家の靈腕を以て一人の實朝の容姿だけをゑがき得たら、確かに

(一)鎌倉時代の日記。吾妻鏡とも書く。今は五十一巻ある。作者未詳。

伶人

(二)宋の佛工。平安末期に來朝し、頼朝、實朝等に仕へた。

(三)大船を由比が濱飯島崎で造

り、四月進保五年

に行はし、船と式

上たが、船がし

つに浮かばな

朝は渡宋の企

に立派な畫であらうが、しかし、更にこれに特殊な背景で情景が添うたら、愈、可なるべきはいふまでもなからう。

さらばこれを彼の傳記中に求めて、畫題として可なるのはいかなる場面であらう。嘗て東鑑について彼の傳を調べたをりの記憶をたどつて、これを數へ舉げて見よう。

まだ十三歳の幼時、しかもすでに將軍として、八月十五日の夜、明月に乗じて由比が濱に出で、一二艘の舟を装はせ、六七人の伶人をして管絃の妙をつくさしめた彼。

胸中鬱勃の懷を遣るべく渡宋の念を起して、燈下に地圖をひろげ、陳和卿と相對した彼。

同じくその目的の爲に造らしめた唐船が愈、成つて、今や海に浮かべようとするのを、半ば希望と半ば不安とを抱いて、砂山の上から眺めてゐる彼。

(一)静岡縣熱海町の東北約一里

(二)相模灣内の初島、箱根路をわが越え、伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ、(續後撰集、實朝)

(三)神奈川県三浦郡葉山村

(四)鴨長明。方丈記の著者。山城鴨社の祠官の子。和歌管絃をよくした。建保元年(一一七三)年六十三(二)歿。

源家はかねて箱根と伊豆山との二所の權現を祈願所として、二所詣をするのを慣例とした。即ち武士數騎を伴なつて、緑の山路から馬の上でいはゆる沖の小島に波の寄るのを見させてゐる彼。關東の風物はその詠歌に感化を與へた。中にも三浦三崎は好んで屢、遊んだ地であつた。三崎の絶壁を見つゝ、かの「大海の磯もとゞろに寄する波、われて碎けてさけて散るかも」の作を口吟んだ彼。風なほ寒き二月の半ば、緑の沖と白き富士とを背景にした杜戸の浦の松原、今の葉山なる森戸に、壯士等の小笠懸を觀つゝ、興を催してゐる彼。

時雨降りすさぶ神無月の夜、關東に下向した鴨の社の氏人長明入道に對して、その物語を聽いてゐる彼。

秋の夜の眞夜中を眠られぬまゝに南面に出た。燈火消え人靜まり、十八日の夜の月の色は幽かに、こほろぎの聲は心を傷ましめる。

青女

(一)出でていなば、主なき宿となりぬとも、軒端の梅よ春を忘るな。

そのかみ

思ひ沈んで數首の歌を獨吟してゐると、夢の如き青女が一人前庭を奔り過ぎようとする。誰そ誰と頻りに問うてゐる彼。

右大臣宣下は、彼に最後の誇と苦痛とを與へた報道であつた。當時精神的壓迫を受けて、確かに神經衰弱に陥つてゐたとおぼしい彼が、一種不吉な豫想に充たされて、胸中無限な不安を抱きつゝ、ぬしなき宿の歌を誦したその夜——建保七年正月の下旬は雪が多かつた。二十三日の晩頭から降始めて、二十四日には山に滿ち地に積んだ拜賀の當日なる二十七日の夜に入つて大雪になつた。——神拜事終つて、二尺餘も降積つた雪の光に、夜なほあかき鶴が岡の石段を下りつゝ、ふと立ちどまつた彼。

など語りつゝ、をると、なんとなくそのかみの時代の心が引入られるやうで、松風、波の音のうちに、彼の幻影が浮かんでくるのであつた。

—文と筆—

(一) 治承四年十二月、平重衡が父清盛の命を受けて奈良東大寺興福寺を焼いた。
 (二) 養和元年三月、重衡等が源行家を尾張國墨股に討つて大破つた。
 (三) 養和元年、平氏は屢々義仲に破られた。
 (四) 壽永元年七月、義仲が延暦寺に據つた。
 (五) 一み吉野の山のあなたがなうき時の身のかくれ家にせんく(古今集よみ人知らず)



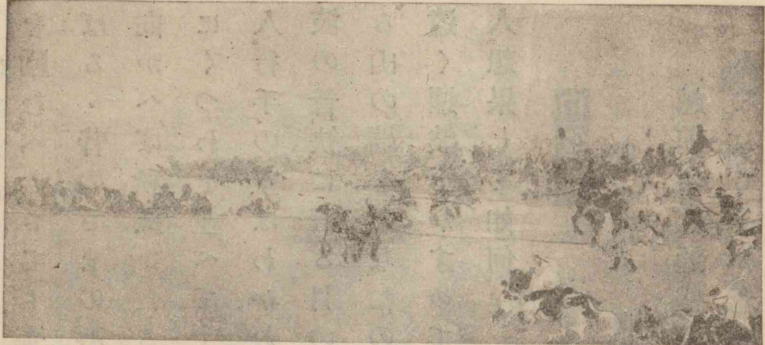
平家の没落(平井榎仙筆)のそ一

凡そ世に傳へ遺されたる歴史は多かれど、平家の都落ばかり、あはれにも、また目ざましきはなかるべし。
 南都の餘燼未だ冷めず、墨股の勝鬨なほ響きぬるに、信越俄に雲亂れて、木曾の五萬騎はや比叡のあなたがに充ち満ちぬ。宇治、淀の備脆くも潰えて、都も今を限りとぞ見えし。あはれ一門の天下身を置くに所なし。世はかく憂きをみ吉野の山のあなたに隠家はなきか。いざさらば已みなん都の中にて

二四 平家の都落

高山林次郎

一炬の煙
 鳳闕
 椒房
 (一) 一ふる里を焼野が原とかへりみて、末は煙の波路を平家物行く平家語平經盛さすらふ
 東帯



平家の没落(平井榎仙筆)のそ二

いかにもならんよりは、西國のみゆきに一旦の凌辱を忍ばせ給はんや。生死も知らぬ別路に、人のあはれの限りもなう、また歸りくべき都としも思はねばにや。六波羅、池殿、西八條以下一門譜第の邸宅、宿房、京白川の四五萬家を併せて、一炬の煙となしはてぬるこそ、あわたしかりしか。
 ここに鳳闕の礎空しく残り、椒房の嵐夜夜悲しむ。保元この方、天下の榮華を盡した。花の都の故郷を、焼野の原と願て、末は煙の波路をば、行方も知らずさすらふらん。直衣、東帯の身にも、今は黒金の衣を着けたれども、誰かは詠歎の餘哀になれて、弓矢の響

翠華搖々

身にしむ秋はあざむかれず

舳

(一)重盛の第三子

清經。明月に對して笛を吹

き海に投じて死んだ。

三軍

(歎)

(一)平清盛の弟の

北の方

おくがた。

(二)京都洛東清水

寺の西南

網代車

やかたを竹か

檜の薄板であ

んたあじろで張つた車。

荷擔 加勢すること。

(一)木曾義仲

郎等

けらい。

(二)京都の南部

白けきる

ひつそりとし

づまりかへる。

ひと時

一時間。

檳榔毛車

上皇や四位以

上の人々の乗

用である牛車

の一種。

絲毛車

院后宮、内親

王、攝政、關白

などの乗用で

ある牛車の一

種。

やなぐひ(胡籬)

矢を盛つて背

負ふもの。

鍬形

かぶとのまび

さしの上から

二本の角のや

うに立てるも

の。

萌葱匂

を勵むべき。さても棄難き命や。今こそはうき世なれ。おすがこしの
ばる。昔のさまの夢に入るをばいかにせん。翠華搖々として西に
向かへば、秋風いたるところ野に満てり。嗚呼、きのふは東關のもと
にくつわを並べて十萬餘騎、けふは西海の波に纜を解きて七千餘
人。行手の空はわかねども、身にしむ秋はあざむかれず。渚に寄する
波の音、袂に宿る月の影、いづれか心を傷ましめざるべき。月の出づ
る山の端を、あなた空とや思しけん。日暮、舳に笛吹く人あり。響は
遠く煙波をかすめて、三軍ひとしく耳をそばだつ。嗚呼、この時、この
人、想果して如何。

自修文

二五

池大納言頼盛

田山花袋

越前三位通盛の北の方の乳母の柏が、清閑寺の邊に幽かに住
みなしてゐる老母の引留めるのを心強く振拂つて、急いで網代

一 橋牛全集

車に乗つてこつちへ出かけて來た時には、もはや六波羅のどこ
ろどころには火が起つて、その黒烟がもくもくと斜に河原の方
へと靡きわたつてゐた。柏は氣が氣でなかつた。果して追附くこ
とができるか、無事に北の方の一行にめぐり遭ふことができる
か、それすらおぼつかないのに、街の人々は皆荷擔して立つて、今
にも木曾の郎等の楯六郎親忠の軍兵が叡山から都に亂入して
くるといふ噂が洪水でもあるかのやうに、あたりには漲りわた
つた。牛飼の男すらあわてきつて、頻りに牛の背に鞭を當てた。
七條から西へ。
柏は中から聲をかけた。牛車はまつしぐらに走つた。
今こそあたりは白けきつてゐるけれども、ひと時ほど前には、
そこらは檳榔毛の車や、絲毛車や、侍の乗つた馬や、やなぐひにさ
された鷹の羽の矢や、鍬形の兜や、萌葱匂の鎧や、紫地の錦の直垂
や、網代車の中にはほのかに透かして見える女房たちなどで一

もえぎ色の絲
鐙の用ひてある

(一)安徳天皇

内侍所

八咫鏡

(二)平徳子。清盛

の女。高倉天

皇の中宮

(三)正二位權大納

言平時忠

警蹕

主上または高

貴な方の出入

の時先拂の

聲をかけて人

をいましめる

こと

杯になつて、今昇りだした朝日の爽かな光線が、繪卷かなんぞのやうに、鮮かにその上を照らした。軍兵はあとからあとへと續き、赤い印の大旗や小旗が、ひつきりなしに動いて行つた。そこに行幸の御輿が來た。神璽、寶劍、内侍所、御同乗は御母、建禮門院、續いて時忠の卿、内藏頭、信基、讃岐中將、時實、さういふ人たちが、甲冑、弓箭を帶して供奉した。しかし、誰の顔にも不安の色の漲りわたつてゐないのはなかつた。これが常の行幸であつたならば、何事もないめでたい行幸であつたならば、兩側に居並ぶ人たちも靜かに、行列も秩序正しく、警蹕の聲もあたりにおごそかに聞えて行つたであらうけれども、今はそれどころではなくて、御輿のあたりが稍いかめしく秩序立てられてあるばかりで、あとは誰が先に出ようが後に退らうが、そんなことをやかましく注意してゐるものはなかつた。公卿も、殿上人も、武家も、侍もすべてごたごたと一緒になつて、黄色い塵埃に包まれながら動いて行つた。

(一)藤原基通

落日
かたむく運命

それでも七條大宮に來て、今までなんのこともなしに供奉に加つて來てゐた攝政内大臣基通の車が、暫し列から離れたかどをかしたかと思つてゐると、いきなり大宮通を飛ぶやうに走つてのぼつて行つてしまつた時には、誰もあれよあれよといはずにはゐられなかつた。しかし、落日になつた彼等の中には、それに對して矢一筋酬いようとする侍すらもなかつた。彼等はたゞぼんやりとそれを見つめるばかりであつた。
朱雀大路の羅城門は全く荒廢してゐたけれども、それでもその朝京の人たちは大勢その上に登つて、その記憶すべき光景を眺めてゐた。そこからは南も北も、七條の通も朱雀大路も、はつきり手に取るやうに見えた。北には京の市街が魚鱗のやうに屋根を並べて、大宮から少し右に寄つた所に、火の手が一つ揚つてゐた。否、六波羅方面にも黒煙が二個所も三個所も揚つて、その大きな殿舎の焼落ちる音が、凄じく手に取るやうに聞えてゐた。そし

(一)比叡山の絶頂の四明岳。

(二)京都の南郊。

(三)清盛のこと。都うつしは、前の治承三年六月、都を福原に移したのをいふ。しかし云々清盛はこの二年前の養和元年に死んだ。

て、そのこつちに賀茂川の水が白く爽かに一筋の布を引いたやうに流れてゐた。大比叡はまたいつもと違つてくつきり晴れて、そこに充滿した源氏——時を隔てず京に亂入する源氏の軍兵が、それとはつきり想像された。どうなる世の中かと誰にも思はれた。幼い主上が御母に抱かれて御輿に召された様も、はつきりと想像され、ば、落ちて行く平家の赤い旗や、赤い印や、馬や、やなぐひや、先へ先へ出ようとする絲毛車や網代車などの列が、長蛇のやうに七條から朱雀大路へ、羅城門へ、更に南に鳥羽へと續いて行つてゐるのを、はつきりと眼にすることができた。やがてこんな會話がそこにある人たちの口から出た。

「入道殿が都うつしをせられたことがおぢやつたな。あれがこの前兆だな。」

「ほんにな……」

「しかし、入道殿はかういふことがあらうとは知らざつたらう

な。」

「さうぢやな……。それにしても、平家はなぜ合戦をせぬのぢや。一合戦もせずにかうして敵に後を見せるといふことは、卑怯ではござらぬか。」

「さやうでござるな。いくら弱うても、ひといくさくらゐる。かういつたが、その時傍にゐたひとりの白ひげの翁は急にそれを遮つて、「いや、京で合戦されては困るぢや。それでないやうに、合戦で京が焼けては、やつとこの頃もとのやうになりかゝつた町が、さんざんぢやによつてな……。それで合戦がないやうに計つたぢや。」

「そんなことあるかな。」

「それはさうぢやな……。合戦があられては困るな……。初めの揉烏帽子の男もさういつて、なんというても、このやうに世間が騒がしうては、どうにもならんな。平家でも源氏でも好いほどに、

揉烏帽子
もんで柔かに
した紙で作つ
た烏帽子。

用
糾
二
三

離宮

鳥羽離宮ともいふ。白河天皇の創建。

平家

平家の軍兵が戻り来る

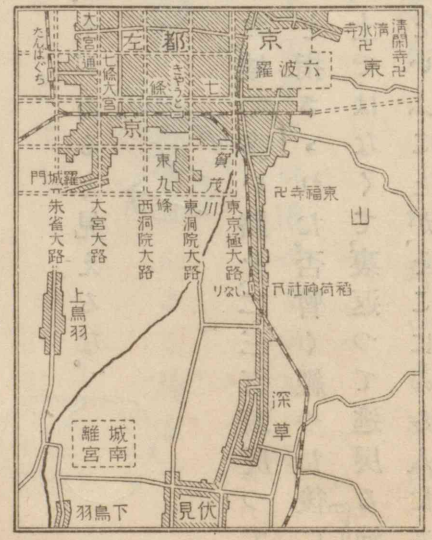
早うどつちかにきまつてもらはねば、し方がござらぬぢやな。」「ほんにぢや——。」「それにしても、源氏はどうしたらうな……まだ叡山から下りて来たやうにも見えぬが——。」「いや、あそこに白い旗が見えるではござらぬか……。」「いや、あれは旗ではござるまい。雲でござらう……。」「こんな話が盡きずに出てゐた。その頃には朝日はすでに高く昇つて、右に流れてゐる桂川が、ところどころ金色に光つて見えるが、一行は黄色い塵埃に包まれながら、長蛇のやうにうねうねと、鳥羽の城南離宮の方へと動いて行つてゐた。御輿の邊は中にも殊に混雑して、赤い旗や、馬や、牛車で一杯になつてゐるのが、それとはつきり指さされて見えた。」「きのふの榮華は夢ぢやな。驕るもの久しからずといふが、けふといふけふは、始めて目のあたりそれを見た。さつきの翁は、さも

さも慨嘆したやうに、白ひげをしごきながらいつた。」「しかし、あたりにゐる人たちは、誰もその相手にはならなかつた。翁はなほも獨言のやうに續けた、平家も平治もわしは見えて来た。清盛入道は運の好い男ぢやつたが、餘りに我意にふるまひ過ぎた。今は神も佛も平家を見棄てたぢや。」「じつと南の方を眺めてゐた揉烏帽子の雑色は、だしぬけに叫んだ。」「不思議ぢや。不思議ぢや。」「どうしたな。」「平家の軍兵が戻り来る。」

(一)保元元年の崇徳天皇の亂と平治元年の藤原信賴の亂とが討つて功が

雑色
足輕

平家の軍兵が戻り来る。」



(一)山城國紀伊郡
深草へ通ずる

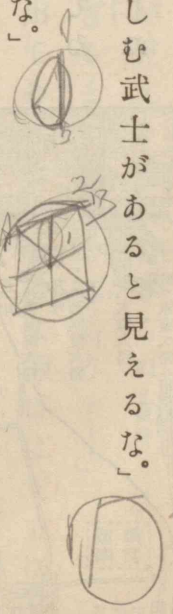
誰の手
誰の配下。

(二)忠盛の第五子
で清盛の異母
弟と邸を池頼
朝と平治の亂
時に命をうけた
かたを頼朝に招
かされて頼朝に
頼朝に返す中か
頼朝に返す中か
年(一)八文がは
五(一)八文がは
五(一)八文がは

「なんと。」
「それ見やれ。こつちは大勢馬が駈けてくる。いや、こつちへは來
ずに、深草路を六波羅へと駈けをる。」
「ほ、これは。」

「平家の中にも名を惜しむ武士があると見えるな。」
「誰の手ぢや。」
「さ、ちよつとわからぬな。」

少くともその路を、赤ちやけた埃の多い路を、二三百騎戻つて
駈けて行くのが、はつきりそれと指さされた。否、暫く經つた後に
は、それは名を惜しむ平家の武士ではなくて、裏返つて逃戻る池
大納言頼盛の手のものであるといふことが、そこにゐる人たち
の耳にも聞えて來た。六波羅の火の手は一層盛になつて、今は美
を盡し善を盡したその殿舎も邸宅も、全くその煙に包まれてし
まふのが見えた。それと同時に、御輿はすでに遠く向ふへ行つて



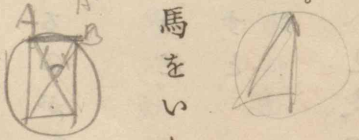
しまつたらしく、一行の殿軍をなした三位中將重衡の赤い旗印
が、僅かにそこに残つてゐるばかりになつた。——通盛の妻——

二六
さあここまで來た
野口米次郎

これが道のどんづまりだ。この先には道がない。
私ひとりで行くより外はない。
私をここまで乗せて來てくれた馬子さん、よく馬をいた
はつて引返して下さい。

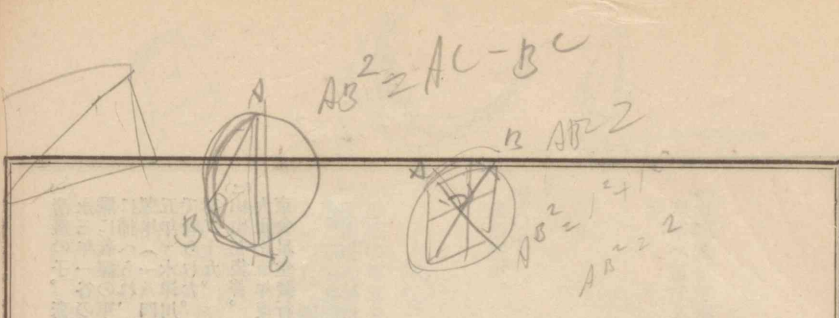
強力さんともここでお別れませう。
この先私と一緒に來てくれるには及ばない。

君の深切を無にするやうだが、これからの道は私の力一
つで求めねばならない。



(一)清盛の子。壽
永三年一谷の
戦に義經の軍
に捕へられた。
翌年(一)八津川
で斬られた。
年二十九。
(二)田山花袋著。
大正十五年東
京金星堂發行

いすはを教



馬子さんも、強力さんも、よく苦痛を私と一緒に嘗めて下すつた。

君等の深切は決して忘れないであります。

だが、この先道のない谷を越え、もう一つ山へ上るのが私の力だ。

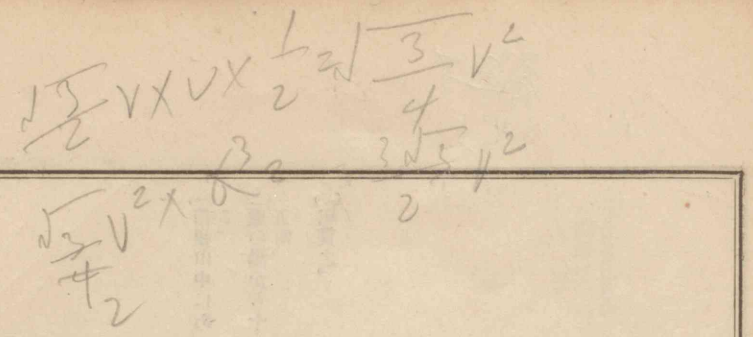
どうか私の成功を祈つて下さい。それが私の頼みだ。

今この山上に立つて、君等と上つた道を見おろすと、すつとの下は綿のやうな雲で包まれ、

その上をしづぎのやうな灰色の霧が右から左へと走つてゐる。

この山にしても、心配なしでは上れない高い山だ。

そして、更に私がひとり得上らうとする山の方を見ると、その山の前に深い大きな谷が横たはり、それを越える道



がない……

だが、そこが私の力だめしだ。私は行手を恐れるものではない。

強力さんも、馬子さんも、私を残して、ずんずん山を下りて下さい。

私が耳をそばだてると、すつとの下の谷底から水が私を呼んでゐる。

あゝ、御覽なさい、暗い谷から高い山へかけて五色の虹が立つてゐる。

私の心のなかで、勇氣がりんりんと鳴つてゐる。

早く馬の頭を廻して、馬子さん、さつきと下山して下さい。

強力さんもさやうなら、またどこかでお目にかゝりませう。

二七 美しき故國

矢代 幸雄

五年目の秋を日本に迎へて、忘れたものに再び出逢つて珍しくてしやうのないやうに、日本の秋は美しいなと思ひました。平野にはまだ夏の名残が暑く溜つてゐる九月初に、昔行きつけた蘆の湯へ登つて行きました。薄が見たかつたからです。湯の花澤へかけての高原を秋風がわたつて、銀緑の細長い薄の葉は貫之の草書の亂れがきはかうもあらうかとばかり波打つてゐました。湯の宿に滞留してゐるうちに、目に見えて秋が惜しくなつて行きました。けふは寒いと思つて高原へ出ると、高原の銀色は見違へるやうにさえて來ました。ここに高原の銀色といふのは、私の好きな薄原のことです。絹絲のやうな穂の藤紫から紅があせて、凄愴としてさえた光がまさつて來たのです。そこに秋風が波打たせてゐました。

(一)箱根山中にある。
 (二)蘆の湯から十五町。
 (三)紀貫之。

了
七

(Switzerland)
(瑞西)

日本は綺麗な國だと思ふのです。日本を褒める爲に外國を悪くいふ氣はいたしません。たゞ日本はほんたうに綺麗な國でした。去年の秋はイギリス、一昨年の秋はイタリー、その前の秋はスويسからドイツを通つてイタリーに歸る、もう一つ前の秋はフランス、スペインを遊び過ぎて、秋ももう深い頃イタリーに歸つた。自然はどこも美しい。秋の空が時雨れても、初冬の空がからりと晴れても、國にその國特有な美しさがある。でも日本の秋——それはまた無上に綺麗です。

秋ばかりではありません、日本の春も殊にさうです。今年は京都から中國九州へと旅して見ました。櫻の花と菜種の花とが到る所満開でした。菜種が野を黄色くんだら縞にすると、櫻は山を鹿子斑にします。土佐繪の夢です。よく古土佐の繪巻物には、例へば、ねざめ物語繪巻の見返に、一面に櫻の花が咲いてゐます。細い枝と

指を
手
手
手

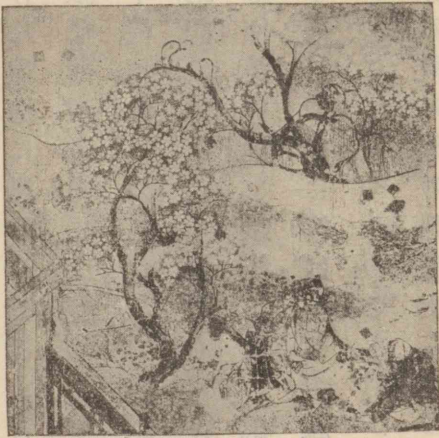
(一)長寛二年夏の
末に奉納。三
十三卷

幹との星のやうな花が、一面にみんなこちらを向いて咲いてゐます。をかしいほど花だらけです。あれを美術の學者は、日本畫に於ける自然の圖案化粧化といひます。いゝえ、そんな人間の勝手に工夫したものではありません。あれが日本の自然の相、そのすなほ日本人の心への印象です。久しぶりに日本の春を歩いて、私は古土佐の繪卷物の國を歩くといつたやうに、華やかに、そして、寂しく浮かれました。

それから秋といへば、この間また平家の嚴島へ納めた經卷を見ました。あれは銀の藝術です。金光眩い佛畫の彩色から、王朝時代の壯嚴藝術が生まれる。金莊嚴が洗はれ白く練れて艶麗となり、纖巧となり、遂に銀色の涼しい夢となる。嚴島經卷を見ながら、私は華麗な神經質の王朝の秋を見たやうな心地がしました。日本の秋の一相が確かにそこにある。經卷の中勸持品でありましたか、料紙裏

旋律

旋律
リズム



返見の卷繪語物めざね

に、銀地に群青色の桔梗の花が、小さい星のやうに寂しさうにかいてありました。銀河に明るい秋の夜に、見えない小さい星を懐かしむ、それともまた萩薄にしつとりと置かれた白露の圖といひませうか。歐洲の秋の野に銀の光の露のおもしろさを私は知りません。あちらの牧場はいち早く刈られて、枝垂れ靡く草の葉がないからでせうか。牧畜が盛で、おいしい草は刈られないうちに、もう放牧の牛と羊とに根元まで綺麗に食べられてしまふのです。西洋の草場は遠見が毛氈を敷いたやうに綺麗なだけです。運動場の芝生の通りです。日本の秋の野は曲線模様です。もの狂はしい旋律です。また薄の

(Napoli, Naples) ナポリの都。イタリアの海に臨み、風景の絶佳を以て知られる。瞥見的感銘

つぎねふ
馬より行く
音のみし泣かゆ

つて、ちやうどうまく白鳥が浮かんだりして、えもいはぬ眺です。けれども、なんだかおぼろげに飽きてしまふのは、やかましく賞められる英國の風景畫に飽きやすいと、大した違ひはありません。イタリアの青空は眼も痛いくらゐ鮮かです。ナポリの白い建物の尖端をしつくりと限る濃藍とも、紺青とも、群青ともいひやうのない永遠相の空も、瞥見的感銘のはげしいわりに、あとに残る感じは大ざつぱです。何故でせう。

二八 妻の真心

佐々木信綱

つぎねふ山背路を、

人づまの馬より行くに、

おの夫の徒歩より行けば、

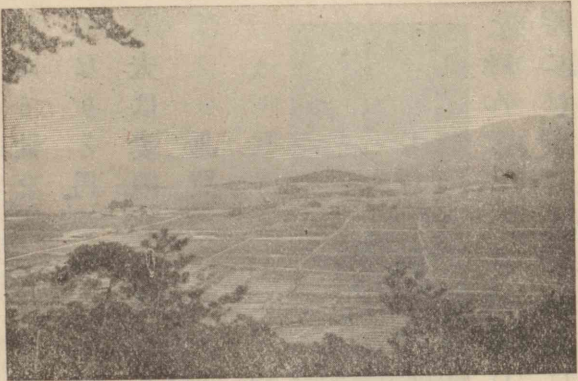
見ること音のみし泣かゆ。

あつちねの母が形見と、
わが持たるまそ鏡に、
あきつひれ負ひ並めもちて
馬かへわが夫。
遠くには天の香具山が見え、藤原の宮
のいらかも霧に籠つた秋の朝籬の下に
は、萩をみなへしなどが咲亂れて居るわ
びしい田舎家の門を、貧しい旅商人は山
城の方へ行くべく、今や立出でようとし
て居る。

まそ鏡

うら若い

(一)奈良縣高市郡
持統文武兩
天皇の宮居



天の香具山を望む

送り出したのはうら若い妻で、その手には古い鏡と、蜻蛉羽のやうな薄い領巾とを捧げて、夫に渡さうとして居る。

妹
娘
妹

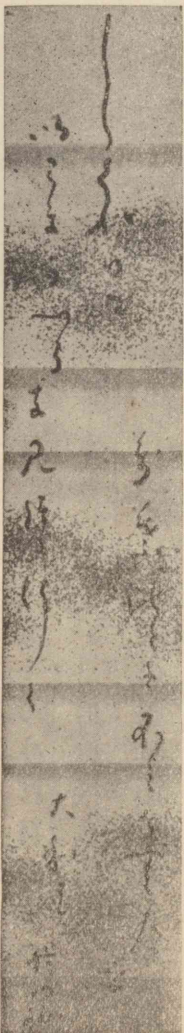
よしゑやし

しくれ日の
いこまかつ
らき見つ
行く萬葉ひ
ともふみけ
ん道を
大和にて
信綱

妻は仲間の商人どもが、いづれも馬で行く遠い旅路に、わが夫が乗るべき馬もなく、いつものやうに歩いて行かうとするのを悲しんで、世を去つた母の形見のこの二品を取出し、これを金に換へてなりと馬を買はれよ」と勧めて居るのである。

夫は妻の心をうれしいとは思ひながら、馬買へば妹がちならんよしゑやしは(た)

石はふむとも我は二人行かん



蹟筆綱信木々佐

と詠んで、それには及ばぬ馬一匹をよし買得ても、御身と俱に行く時には、御身は歩かねばならぬよしや石を踏んでも、二人で踏まう」と答へる。

これは萬葉集十三の巻に出て居る歌である。かの山内一豊の妻が、鏡匣から黄金を取出して、夫の爲に馬を買はうといった話と、千餘年を隔てた好一對な物語である。夫妻の情はこのやうにあらねばならぬと思ふ。

二九 女子と文學

わが國の女子には和歌に秀でしもの、才學男子をして後へに瞠若たらしめしもの、上古以來屢見るところなり。萬葉集の中にも額田女王、石川郎女、坂上大郎女など、巾幗者流の作品、また決して少しとせず。されどその才媛淑女の彬々として輩出せるは實に平安時代にして、文學は殆ど女流の獨占到歸し、男子はあるかなきかにその一隅にけおされぬ。そのかくの如くなりしは、基づくところ一にして足らざるべしと雖も、女御、更衣が各その威勢を張りて權力を

瞠若
(一)天武天皇の妃
(二)天武天皇の皇子
子大津皇子の
妃
(三)大伴宿奈麿の
女。母は大伴
坂上郎女。
巾幗者流
彬々

更衣(女御に下)
女御
女

唱和贈答
文學の淵藪
彩華爛漫

争へるも、またその一主因たるべし。即ち才學ある女子は、擧つてその招に應じて後宮に集れるなり。集りては互に才を競ひ、男子もまたこれと唱和贈答せんことを求めければ、後宮はやがて文學の淵藪、女房は即ち文界の粹となれり。かくて彩華爛漫たる平安女流文學は生まれ出でたるなり。

天成の詩人

平安時代の女流文學者の中にて、最も著れしものを擧ぐれば、和歌には小野小町、和泉式部などあり。散文には紫式部、清少納言などあり。小野小町は女性美の最もよく發揮せられたる一人として、常に業平と對せしめらる。業平は天成の詩人にして、その心に感ずるれまゝの歌となれるもの、風の河上を行きて水おのづからに文をなすが如し。たゞそれ感情の走るに任せて口の上せ敢へて刻苦鍊磨をなさず、いはゆる心餘りて詞足らざるところあり。小町もまた業平の亞流にして、たゞ感情のまゝに詠出す。その詠の業平に比して、

亞流

多情多恨

盡きざる概あり



小野小町

更に濃艶優麗なるもの多かりしは、さすがに女性の作なればなるべし。和泉式部もまた才色雙絶、多情多恨、ものに拘束せられず。怨みては咽せび笑ひては鳴り、綿々滾々として盡きざる概あるもの、實にその性情のほとばしり出でしところなり。その詩才の豊富にして所作の多量なるは、蓋し小町の上に出づ。若しそれ和歌の眞の價値を以てすれば、この式部こそ業平と並べて、平安歌人中の二星といふべけれ。

源氏物語の著者は、人も知る如く紫式部なり。早く夫に後れて寡

源氏物語
相並り
竹島木
夕
源氏物語
源氏物語
源氏物語

北本
南本
源氏物語
源氏物語
源氏物語

千載のもと

逸氣奔放

警拔

溢滯

居せる時にこの大著を成し遂げたるなり。性貞淑にして節操の譽高く、その徳行は千載のもと、婦女の龜鑑とするに足るものありしを以て、その詞想もまた放縱浮薄なる當時の人情風俗を描寫しながら、何所ともなく氣品高く、同情に富み、その筆致もまた逸氣奔放の風なく、順良謹慎にして長所に誇らざる趣あり。

清少納言に至りては、その性情正に紫式部と相反し、機敏にして才情溢れ、屢人を驚かせり。その著枕草子は、多く彼が遭遇せる事實の追憶、さらずば時々をりをりの見聞感想にして、秩序もなく、筆に任せて書列ねたるものなり。而してその文を行くや、奔放にして自由、些の溢滯を見ず、偽らず、飾らず、眞率に彼が本來の面目を暴露し來りて、その驕慢なる虚榮心の、隨所にはの見たるもをか。しかもその觀察は緻密周到を極め、言々は痛快警拔、寸鐵よく人を殺すが如きものあり。

- (一) 後鳥羽天皇の宮女、右京大夫源師光の女、元暦年中の人、平度繁の女。
- (二) 弘安六年(一八九四年)卒。
- (三) 從位。中納言藤原雅孝の男。
- (四) 正二位權中納言。俊成の子。京極中納言と稱する。仁治二年(一九〇一年)卒。年八十。
- (五) 正二位大納言。土御門内大臣源通親の男。
- (六) 從二位。中納言藤原光隆の男。

かくして紫式部と清少納言とは、その相反せる性情と著作とによりて、平安時代の文學を飾れるなり。その他、赤染衛門、伊勢大輔等も、またこの時代にありて名を知られたる才媛なり。

降りて鎌倉時代に入りては、和歌に式子内親王、宮内卿あり。散文に阿佛尼あり。式子内親王は後白河天皇の皇女にして、當時和歌を以て著れし雅家、定家、通具、家隆等も及ばざるところありきといふ。されどこの時代を代表せる女流は阿佛尼なり。阿佛尼は藤原爲家の室。その著十六夜日記の文、詞短くして意長く、平易にして高雅なり。その地勢形勝を叙して簡明なる間に所々旅情をのべ、怨恨の念を洩らし、子を思ふ親の心を寫せるうちに、一種の趣味を味はふことを得べし。

これより室町時代以後に至りては、女子はいたく卑下せられ、武人ひとり天下に跋扈する情態となれり。さればまた平安時代の如

(一)傳記未詳。家康に仕へ、秀忠の女千姫が時頼につて大坂城に入り、淀君の信任を得た。

(二)伊勢の神官荒木田武遇の養女。慶徳三郎大夫の妻。文化三年(二四年)歿。七十五。

花まちし春にかへすや麗 郭公

(三)水鏡、大鏡、増鏡

き才媛の輩出するを見ること能はず。たゞ戦亂の世にありて、小野お通の博學にして文をよくし、十二段草子を作れりといへるは珍し。徳川氏天下を一統して文教を奨励するに至りても、女流文學者にして遠く中古の盛に比すべきものを見ず。中につきて加賀の千代の俳句に於ける、荒木田麗女の歴史に於ける、やゝ見るべきあるのみなり。千代女の、ほとゝぎすほとゝぎすとしてあけにけり。の句は、

な、ち、ま、ち、し、あ、い、に、あ、ま、り、や、郭、公、の、あ、ら、ま、り、

麗女筆蹟

人のよく知るところなり。荒木田麗女の月の行方、池の藻屑は三鏡の後を續ぎ、慶長の頃に至るまでの歴史を述べ、わが國女流の歴史家として、人の推奨するところなり。わが國の女流文學は、かくの如くにして明治聖代の文化に入る

研鑽

ことを得たり。王政の維新と共に、女子の教育日に月に隆盛に赴き、また昔日の比に非ず。將來社會文化の進むにつれて、男子は研究發明に心を潜め、生存競争に力を盡すべし。この時に當りて、女子たるものまたわが固有の文學を研鑽し、以て文學史上に光彩を添ふる覺悟なかるべからず。

—藤岡作太郎「國文學史講話」による—

三〇 蓮月尼の半面(二面) 武島羽衣

歌人に最も重んずべきは人格である。口に三十一音を聯ね、短冊色紙にすらすらと書流すばかりが決して歌人ではない。歌人といはれるには、まづそれよりも初に、その心胸が歌になつて居らねばならぬ。人格が歌らしくなつてゐなければならぬ。自らは歌人であると、正々堂々と大看板を出す人も、内心を探つて見れば、とかく俗悪陋劣鼻もちのならぬものが數多ある世の中に、私は幕末の歌人

陋劣

題

この蓮月尼に於て、最も優しい、すぐれた清らかな人格の理想歌人
を見ることを得るのは、大いに喜ばしく思ふのである。

柳 うぐひすの都に出でんか宿に

かさばやと思ふ梅さきにけり

水邊 ありたちて朝榮あらへば賀茂川の

きしの柳にうぐひすのなく

なんといい優しい女らしい氣分の歌であらう。

輝き抄りて うつばりのすゝも心のちりひぢも

はらひて清き年のくれかな

うらやまし心のまゝに咲きて

すがすがしくもちる櫻かな

なんといい清々しい品性の見えてゐる歌であらう。かの誰も知つ
てゐる

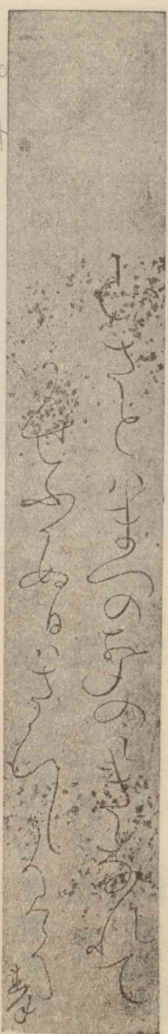
輝き抄りて
うつばり
系
系
系

蓮月尼
蓮月尼

の温順なのや、若しくは

山ざとはまつの聲のみき、なれて

かせふかぬ日はさびしかりけり



蓮月尼筆蹟

意表に出る
一字は暁陽、後
魏の太武帝に
仕へて太守と
なつた。諡は
○年頃の西
暦の人。

の意表に出たのなど、いづれかこの人の真心の現れでないものが
あらう。昔は呂温が、李紳の詩に「鋤禾日當午、汗滴禾下土。誰知盤中飧、
粒々皆辛苦」とあるのを評して、この人必ず卿相たらんといつたが、
詩によつてその人の氣質の曠か、褊か、尊か、陋か、一讀見わけのつく
ことのできるの、争はれぬ事實である。蓮月の歌には些の銜氣が

銜氣

蓮月

蓮月

つらさをば
ひしこくを
ねのやしろ
ねのほふき
はみくこと
はみくこと
羽衣

のも少くはなかつた。蓮月は非常にこれをうるさがり、跡を晦ます爲にたびたび轉宅した。年々五六回、多い時は八九回も居を移し、常に門を鎖して「蓮月留守」との貼札をしてゐたといふ。かく引越はかの女のおきまりであつたので、人呼んで「屋越の蓮月」といつたといふことである。また言寄らぬまでも、遠近から書を寄せて、その返辭

蓮月

つらさをばひしこくをねのやしろねのほふきはみくこと

武鳥羽衣筆蹟

を得ようと希ふものも多く、煩に堪へなかつたので、その手紙の使者に「世捨人の返事せぬ無禮はお容し下され。但しこれは落手の印である」と彼の自製の陶器即ち蓮月焼一個を持たせてやるのが例であつたといふ。尤も最後の住宅たる西賀茂の神光院境内の草庵は、人に知られてから訪問の客ひきもきらず、諸侯が、歌人があ

酒々落々

(一)山城國愛宕郡

(二)近江國栗太郡の宿驛

り、儒者があり、茶人があり、蓮月も随分閉口した様子であつたが、この住居の幽邃で閑雅なのは、見棄てるに忍びなかつたものと見え、遂にここから移動することはなかつたのである。たびたびの轉宅を人の笑つた時、これに酬いた蓮月の歌がある。
浮草のここにかしこにたゞよふも
きえせぬほどのすさびなりけり
酒々落々、その胸中がそつくり現れてゐるではないか。

三十一 十六夜日記

阿 佛 尼

(一) 粟田口といふ所より車は返しつ。程なく逢坂の關こゆるほどに
さだめなき命は知らぬ旅なれど
またあふ坂とたのめてぞゆく
(二) 野路といふ所は、こし方ゆく先人も見えず。日は暮れかゝりて、い

(一)同國野洲郡の宿驛。

(二)野洲郡。

例 野洲

(三)野洲郡。

(四)同國坂田郡。

ともの悲しと思ふに、時雨さへうちそぐ。
うちしぐれふる里おもふ袖ぬれて

ゆくさき遠き野路のしの原

こよひは鏡といふ所に着くべしと定めつれど、暮れはてて行き
つかず、守山にとゞまりぬ。ここにも時雨なほ慕ひ來にけり。

いとどなほ袖ぬらせとや宿りけん

まなく時雨のもる山にしも

けふは十六日の夜なりけりいと苦しくて臥しぬ。未だ月の光は
微かに残りたる曙に、守山を出でて行く。やす川渡るほど、先立ちて
行く旅人の駒の足の音ばかりさやかにて、霧いと深し。

旅人は皆もろともに朝立ちて

こまうちわたす野洲の川霧

十七日の夜は、小野のしゆくといふ所にとゞまる。月出でて、山の

けぢめ見えて
おもしろし

(一)坂田郡。名高
い清泉がある
のでこの里の
名とした。

(二)美濃國不破郡
古今集に「み
のの國せきの
藤川たえすし
て、君に仕ま
へんよろつ代ま
でに。」

(三)同郡。天武天
皇の時に始る。
鈴鹿、逢坂を
合はせて三關
と稱する。

峰に立ちつゞきたる松の木の間に、けぢめ見えていとおもしろし。こ
こは夜深き霧のまよひにたどり出でつ。さめがゐるといふ水、夏なら
ばうち過ぎましやと思ふに、かちびとはなほ立寄りて汲むめり。
むすぶ手に濁る心をすゝぎなば、うき世の夢やさめが井の水

とぞおぼゆる。

十八日、美濃の國關の藤川渡るほどに、まづ思ひつゞける。

わが子ども君に仕へん爲ならで

渡らましやは關のふぢ川

不破の關屋の板庇は、今もかはらざりけり。

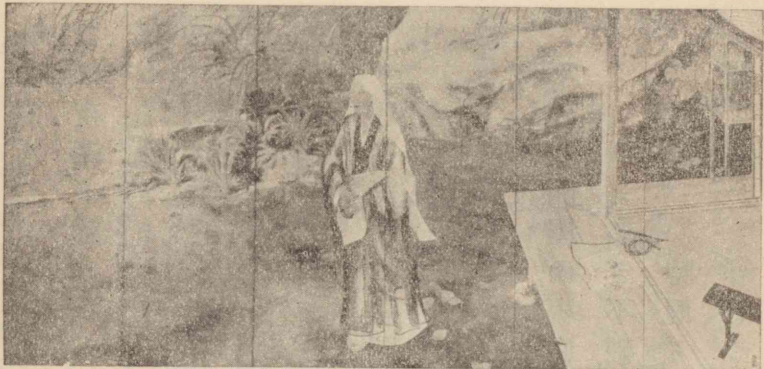
ひま多き不破の關屋はこのほどの

時雨も月もいかにもるらん

關よりかき暮しつる雨時雨に過ぎてふり暮せば、道もいとあし

心より外に
同國安八郡。

(二)三河國寶飯郡。



鎌倉の阿佛尼(川船水棹筆)

くて心より外に笠縫のうまやといふ所に暮れはてねどとゞまる。

旅人はみのうち拂ふ夕暮の

あめに宿かる笠ぬひの里

二十一日、八橋を出でて行くに、いとよく晴れたり。山遠きはら野を分けゆく。晝つ方になりて、紅葉いとおほき山に向かひて行く。風につれなきところどころ、朽葉に染めかへてけり。常磐木どもも立ちまじりて、あをぢの錦を見る心地す。人に問へば宮路山といふ。しぐれけり染むる。ちしほのはてはまた

もみぢの錦いろかはるまで

この山まではむかし見し心地するに、頃さへ變らねば、

待ちけりな昔も越えし宮路山

おなじ時雨のめぐりあふ世を

山の裾野の竹のある所に、茅屋のひとつ見ゆる、いかにして、何の

たよりにかくて住むらんと見ゆ。

ぬしやたれ山の裾野に宿しめて

あたり寂しき竹のひとむら

日は入りはてて、なほものあやめもわかぬほどに、わたうどと

かやいふ所にとゞまりぬ。

自修文

三二

雲の峰

相馬御風

夏の自然の興へる最も大きな歡の一つは、晴れわたった大空

ものあやめ
(一)寶飯郡。度津とも渡津とも書く。

たゞすまひ
ありさま。

同ず
一致する。

(一)新潟縣西頭城
郡糸魚川町の
海岸。

の涯に、日毎にあの雄大な雲の峰の姿を眺め得ることである。毎年のことではあるが、私はふとあの雲の峰のたゞすまひに目を留めた時に、始めて眞に「夏」そのものを感じ得たやうな気がした。濃青に澄みわたつた空の涯から、靜かに高く湧出たあの眞白な雲の雄姿に對する時、私の心は自然の悠久そのものと同じたとしてもいひたいやうな不思議に靜かな歡を感じず。埃まみれになつてあの炎熱の街路をうろつき廻つてゐた都會生活の間にあつても、私には雲の峰の姿に眺め入ることが、夏毎に得られる有難い心の慰めの一つであつた。

ついこの間のことである。私は三四人の友だちと海岸の波打際に近い砂上に寢そべつて、夕暮近い涼風を身に浴びながら、さまざまな雑談を楽しんでゐた。なざわつたつた海の上には、鳥賊の夜釣にと沖へ急ぐ漁舟の白帆の群が光つてゐた。水平線の能登半島の山々の見えるはずのあたりと、佐渡の山に見えるはずの

(2)Isbnix
昔エジプトで
宮殿や墳墓な
どの爲に設けた
人面獅身の像。

(1)Tolstoy
ロシアの文豪
（西暦一八二〇
年—一九一〇
年）

あたりには、地上の山の見えない代りに、眞白な雲の峰が大空高く湧きあがつてゐた。私たちの視線はいつの間にか、いひ合はせたりやうに、その方へひきつけられてゐた。そして、それに對するさまざまな讚美の言葉が、次々に私たち各自の唇から洩れた。私たちはまたいつとなしに、幼いものの中に取交されるやうな話を、その雲の峰の形について取交したりした。甲はいつた、
「ほら、あそここのあの端の所が、まるでエジプトの Sphinx のやうに見えるぢやありませんか。」
乙はいつた、

「わたしはまた、あそこの上へ一段高くなつた所が、以前寫眞版で見たトルストイの横顔に似てゐると思つて、さつきから眺めてゐたんですよ。」
すると丙が横あひから、
「あなた方の話を聞いてゐると、まるで『ハムレット』の中のハム

Polonia
追従的
おせじ風な。
オフヘリヤ
オヘリヤハムレット
諧謔
しやれ。

レットとポロニアスとの會話みたいですね。あの、そら、ハムレットがポロニアスの追従的な態度をちやかすつもりか何かで、空の雲を指しながら、「あの雲は駱駝のやうに見えるね。」といふと、ポロニアスが「はい、はい、駱駝のやうにも見えまするな。」といつて見物を笑はせる、あの場面です。

丙のこの諧謔は、ほんの暫くの間でしかなかつたが、すつかりその場合の私たちの興を破つてしまつた。しかし、すぐそのあとで乙によつて話された東北地方のどこかで、廣く俗間に信じられてゐるといふ一つの傳説が、私たちの心持に再び詩的な潤を與へてくれた。但し、その傳説といふのは、次のやうな至極簡単な話でしかなかつた。

「入道雲は自分が何に似てゐるとか、誰々に似てゐるとか、いふやうに形を見定められることが、何よりも嫌ひだ。それ故人が自分を見て、或一つの形を見定めると、見る間に形を變へてし

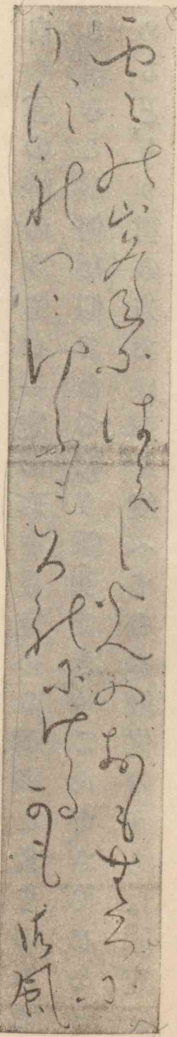
まふ。
だが、この至極簡単な話が、とりわけ私にはたまらなくおもしろく感じられたのであつた。
「いかにもさうだ。私の心はうなづいた。雲の峰には定まつた形はない。それは一刹那たりとも固定してはゐない。絶間なく動きつゝある。絶間なく變りつゝある。しかも私たちは、それに氣づかないのだ。ただ眞に私たちがその事實を認め得るのは、私たちが自ら雲の峰のうちに一定の形を見定める瞬間に於てのみである。あそこが何に似てゐる。かう獨りできめこんで、さてじつと眺めると、もう雲の方では形を變へてゐる。變化のうちに固定を求め、無常のうちに常住を認める——その時私たちは、始めて眞に變化と無常とを認めるのである。

まふ。
「雲の峰は形を見定められることが、何より嫌ひだ。」
なるほどこれはおもしろい——私の心は再びかううなづい

雲の峰には
えし光のほ
すもつろに
すもつろに
けふもくれ
けるかも
御風

變化に云々
變化するから
といつて變化
に拘泥せず
不變(常住)で
あるからとい
つて不變にと
らはれずには
いつてもかは
るところのな
い心で對して
こそ眞に雲
の峰と一致す
るのだから。

たのであつた。
それにしても、絶間なしに動き、絶間なしに變りつゝも、雲の峰は私たちになんといふ静かさ、なんといふ安らかさを感じさせることであらう。



相馬御風筆蹟

しかもその運動に、その變化にのみ徒に心をひかれる時、私たちにはその静かさ、その安らかさは感ずることができない。またその静かさ安らかさにのみ徒にたよつて、そこに自分勝手の形態を見定め、飽くまでもその固定した形態に執着しようとする時、私たちには却つてその静かさ安らかさが失はれてしまふ。變化に囚はれず、常住に執せず、あるがまゝのほがらかな心で對する時のみ、私たちは眞に雲の峰と同ずることができるのであ

心境
よ。心のおきばし
心の境地

(一) 支那浙江省杭州府城西。風景絶佳。古來十景の稱がある。
(二) 浙江省孤山の麓にある。
(三) 西湖十景の一。

らう。

朝夕の風が冷え冷えと肌に感じられる頃になつて、雲の峰が頻りにちぎれちぎれに空に浮かび出るのを眺めることにも、私は年毎に新たな感興を興へられる。なんともいつて見やうもない軟かさを持つた白い雲の塊が、悠々と秋めいた空の上を動いて行く。じつとそれを眺めてゐる心持にも、私は年々に新たな歡を覚える。心は白雲と同じく遠し。といつた古人の語に藏されてゐる心境は、永遠に懐かしまるべきであらう。――野を歩む者――

三三三 西湖の月

谷崎潤一郎

夕食を済ませた後、西湖の月を見るべく、ホテルの後から畫舫に乗つて出たのは、その晩の九時頃であつたらう。東岸に沿うて湧金門から柳浪聞鶯の方へ漕いで行かせながら、私は舳に座を占めて、

(一)江西省九江府
(二)江西省潯陽道
匡山ともいふ。
風景絶佳。

一點の曇もない大空の月の光を、満身に浴びてゐた。いかに隈なく
晴れわたつた宵であつたかといふことは、湖を取巻いてゐる四方
の山々や、汀に近く女の洗髪のやうにうなだれてゐる楊柳や、稀に
は岸邊の樓閣などまでが、一つ一つその影を水面に落してゐたの
でも、大凡想像することができよう。嘗て潯陽江邊の甘棠湖の月を
観た時に、雄大な廬山(一)の山容が水にくつきりと映つてゐるのを眺
めた覺はあるけれど、今夜の月は、あの時にもまして朗かである上
に、湖の廣さもまた甘棠湖よりは遙かに大きい。水のおもてといふ
ものは、それでなくてもかういふ晩には、實際よりひろびろと見え
るものだが、船がだんだん陸を離れるにつれて、私の行手にたゞへ
られてゐる湖の水は、腹が膨がるやうに底の方から盛上つて來て、
次第に岸を遠くの方へ追ひやつてしまふのである。ここでちよい
と斷つて置きたいのは、西湖の風景が美しいのは、主としてその湖

宵の夜
A B C

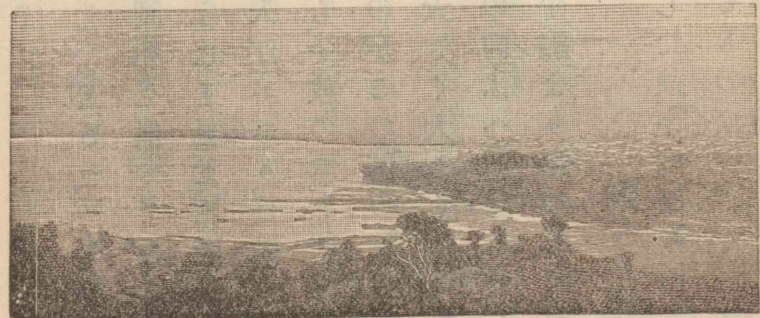
(一)湖南省の北部
支那第一の大湖
(二)江西省の北部
支那第二の大湖

鼓橋

水の面積が、洞庭湖や鄱陽湖のやうなばかばかしい大きさでなく、
ひと目で見わたされる範圍に於て、蒼茫とした廣さを持ち、優しい
姿をした周圍の山や丘陵と、極めて適當な調和を保つてゐる點に
あるのだと思ふ。雄大だと思へば雄大なやうにも見え、箱庭のやう
だと思へば箱庭のやうにも見え、その間に入江があり、長堤があり、
島嶼があり、鼓橋があつて、變化はありながら、一枚の繪を擴げた如
く、すべてが同時に双の眸(まなこ)にはいつてくるのが、この湖の特長であ
る。今夜にしても、船が進むに隨つて、無限に大きく大きく開いて行
くやうに覺えながらも、陸は決して地平線の向ふへは隠れてしま
はないが、その實、岸邊の山だの森だのは、地平線より却つてずつと
遠くにあるもののやうに感ぜられる。
首を擧げて四方の陸をぐるりと眺め廻した後、今度はそろそろ
と眼を下の方へ向けると、私の視野にはいるものは、やがてたゞ一

吃水

面の波ばかりになつてしまつて、なんだか船が水の上を渡つてゐるのではなく、水の底に沈みつゝあるやうな心地がする。その上、この湖の水は月明りのせいもあらうけれど、さながら深い山奥の靈泉のやうに透徹つてゐるので、鏡にも似たその表面に、船の影が倒に映つてゐなかつたら、殆どどこから空氣の世界になり、どこから水の世界になるのだから區別がつかないほど、底の方まではつきりと見えてゐるのである。吃水の浅い、草履のやうに薄つべらな船の上に横たはつて、水と空氣との相觸れる平面を滑かに進んで行く私の體は、たゞぬれてゐ



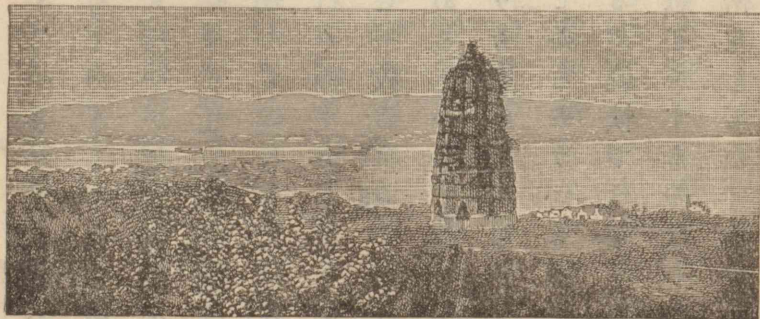
一のそ湖 西

吃水
湖

(一) 宋の詩人、名は、盧和靖、西湖に結廬して、梅を植ゑ、四年に及ぶ。天禧元年、十二月、歿。年六十二。

(二) 林和靖の山園、小梅の詩の句。

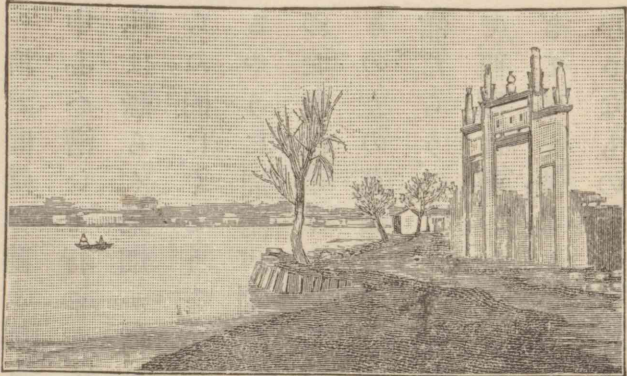
ないのが不思議なだけで、時には全く水の世界に潜入したといつてもいいくらいである。舷に顔を出して底を見きはめると、深さはやうやう二三尺か四五尺よりない。林和靖が「疎影横斜水清淺」といつたのは、思ふにこの湖のことであらうが、「水清淺」の意味と美しさとは、かうしてこの底を眺める時に、始めて明らかに會得することができ、私はさつき、深山の靈泉のやうに透徹つてゐるといつたけれども、たゞそれだけでは、到底この時の感じを言表すにはもの足りない。なぜかといふのに、ここにたゞへられてゐる三四尺の深さの水は、靈泉の如く清



二のそ湖 西

羅衣

例なばかりでなく、一種異様な、例へば、とろゝのやうな重みのある滑かさ、飴のやうな粘とを持つてゐるからである。この水の數滴を掌に掬んで、暫く空中に曝して置いたなら、冷やかな月の光を受留めて、水晶の如く凝りかたまつてしまふだらう。私の船の艚は、そのねつとりした重い水を、すらりすらりと切つて進むのではなく、ぬらぬらとこね返すやうにして、操られて行くのである。をりをりを艚が水面を離れると、水は青白く光りながら、一枚の羅衣（ろい）のやうに、それへべつたりと纏はり着く。水に纖維があるといつてはをかし、いけれども、全くこの湖の水は、蜘蛛の絲よりも更に微かな、さうして、妙に執拗（しつごう）な弾力のある纖維から成立つてゐるやうにも感ぜられる。とにかくにも綺麗に澄んだ水ではあるが、輕快ではなく、寧ろ鈍重な氣分を含んだ水なのである。そんな感じがするのは、一つには、その水底（みぞ）に蒼苔のやうな細かい藻草が密生してゐて、柔かいビ



柳 浪 聞 鶯

ロードの床のやうな暗綠色の光澤を反射してゐるせいでもあらう。實際それは、非常に精巧な、驚くほど美しい艶と潤とを持つたビロードといふより、外に適當な言葉を知らない。さうして、大空の月の女神は、そのビロードの地質を一層つやつやと光らせる爲に、無数の長い銀の絲で、蛇のうねりのやうな波紋を、一面に縫取つてゐるのである。若しこの湖に仙女があるならば、かの女の纏ふべきマントの色は、必ずこのビロード色であるに違ひない。底が餘りに淺い爲に、どうかすると、艚は心なくもそのビロードの面をかき亂す。はつと砂埃が風に舞上るやうに、濁つた泥が

(二)共に西湖の
邊にある山。

圓い輪をゑがいて、煙のやうに水中に浮かび上る。柳浪聞鶯の前を通り過ぎた船は、今度は進路を西に取つて、湖の中心へ漕いで行つた。左岸に黒くかたまつてゐる背の低い一叢の林は、恐らく桑畑か何かであらう。右岸はと見ると、船が私の知らぬ間に、ぐるりと方向を一轉したので、なんだかかう、急に眼が廻るやうに、周圍が濶然とうち開け、寶石山の保叔塔が、波に没しかつた帆柱のやうに、遙かな空にぼうつと夢の如く淡く霞んでゐる。その左の葛嶺の山の裾に、灯がちらちらと瞬いてゐるのは、新々旅館だらう。ここから眺めわたした様子では、向岸までは非常に遙かで、西湖は海の如く廣がつてゐる。しかし、海にしては水面が穩か過ぎて、殆ど波らしいものは眼に留らない。私の體が蟲けらのやうな小さなもので、偉大な大理石の圓盤の中に置かれてゐるのかとも想像される。子供の時分に野原の眞中などで、眼を瞑つてぐるぐる

(一)池の中にある
小さい島の山。
(二)以下いづれも
西湖の三面を
圍んだ山。

と廻つた後で、またはつと眼を開くと、よくこんな廣々とした、氣が遠くなるやうな天地の大きさを感じた覺がある。だが、それよりも、ほ不思議なのは、そんなに廣々としてゐながら、どこまで行つても、水は依然として二三尺の、或はせいぜい人間の胸のあたりまでつかるくらゐな深さしかない。西湖は湖ではなくて、恐い大きな池であるかの如くに、その時しみじみと感ぜられたのであつた。巨人が箱庭を作るとしたら、きつとこの西湖のやうなものであつた。さうして、その面にあらゆる物象が鮮かな影を印してゐるのは、畢竟、水底がかくの如く浅い爲に、波らしい波が立たない結果なのであらう。たらひの中にも山の影は映るやうに、たとひ二三尺の深さでも、水はやつぱり水である。正面に鬱蒼と堆く盛上つてゐる孤山の翠嵐を始として、その左に低く長く、女性的な優雅な曲線を起伏させてゐる天竺

詩の体 (権類)

絶句 一 句

律 一 句

排律 一 句

以上

目行 (又は歌)

Handwritten notes in the right margin, including the characters 'たい' and some illegible cursive text.

引出物

引出物 (Handwritten note)

た情あるべきと覺えければ、聲をしるべにて、誰の人にかと尋ね問ふに、我はこれ商人の妻なり。昔よはひ十三にて、琵琶を習ひ得たること世に勝れたりき。帝の御前にてひとたび調べしにも、の御引出物を賜はりき。また眉目容貌ありがたく珍しきほどなりき。然れども春過ぎ秋暮れて、みめかたちありしにもあらず衰へにしかば、世に經る力失せはてて、せん方なくなりしより、商人に契を結びて、この國の民となれりき。商人情なければ別を惜しむこといと淺し。我を懇にせねば、出でていぬる後、立歸るほど久し。歸るほどおそければ、おのづから待たずしもあらずかゝるまゝには、たゞ空しき船を守りつゝ、秋の月の凄じきをのみ見る。といへり。白樂天「我琵琶の聲を聞きて愁深し。またこの語らひを聞くに、とり重ねたる心地す。我も君も愁の心同じからずや。必ずその愁の盡きせぬことを思ひ知るべし。我いにし年の秋より、官を遁れ都を離れてここに沈め

病のむしろ

り。また病のむしろに臥して、たちあること容易からず。いとも心の細きをりに、浪風より外に立ちまじる人もなき住所には、蘆の上葉をわたる嵐をちこち人の舟よばふ音のみ聞えて、未だ樂の聲を聞かず。今宵の君が琵琶のしらべを聞くに、ほとほと天の樂を聞かんが如し。これを聽く人皆涙を流せり。その中にも白樂天一人袂くちぬと見えけり。

この人は、世の中の人の心の皆濁れるを憂しとや思ひけん、一人すまして、常は都に跡をなん留めざりける。

唐物語

三五 師の君へ(バリより) 前田 漢子

その後心にもなき御ぶさたいたし、申わけもこれなく候。御變り

(東京市本郷區なる筆者の邸)

もいらせられず候ふや、御案じ申上候。承れば、少し御すぐれなかりし由、その後いかなる御様子にや、御伺申上候。私事も御蔭さまにてすこやかに日を送り居候ふまゝ、恐ながら御安心下され度願上候。さて豫て御願ひ申上候ふ歌、御調へ下され候ふ上、御送り戴き候ふ由、本郷より通知これあり候ふところ、本日落手いたし候。詠みつほなしにて出發いたし、御手数相かけ、いかばかり御苦心あそばされ候ふかと、御禮の申上げやうもこれなく候。あともすでに御送り申上候ふまゝ、さだめし御受取下され候ひしことと存じ居候。何分にもよろしく御願申上候。これよりはゆるゆる詠み樂しみ申すべく候。このたびは前とは異なり、長き月日のことにてもあり、それに平和の時節のこととて、この前のやうに委しく日記に詠上ぐる氣にもなられず、をりをりは詠候へども、別段申上ぐるほどのできもこれなきやう存候。先月末ランスと申す所へ參候ふが、そこは獨軍が

Reinas

三五 師の君へ(バリより)

一六七

(Belgium.)
白耳義)

破壊して直ちにベルギーにふみこみ、最後まで戦の續きし所の由見物いたし候ふところ、實にあはれなるものにござ候。名高き寺院を始め、あたりの家は皆むごたらしく壞れて、手のつけやうもなきなど、火事のあとに行きし心地いたされ候。

へすぎし日のいくさを今もかたるかな

武士のちしほまだひぬこちして

花のパリはさすがに芝居に、茶店に、晝夜の區別もなきほど賑はひ居候へども、かゝる方面へ喜びて足を向くるは、おもに外國人にて、上流婦人は餘り出入いたさず候。この國にては、うす色のあでやかなるを身にまとふは卑しき人のたぐひとか。よき人々は悉く黒つほきものを着用いたし、日本婦人もうら耻づかしきほどおとな

(High collar.)

しやかなるものにござ候。それに、若き婦人は、一人にては夜分外出せぬとか。家の監督は皆主婦がいたし候ふこと、殆ど日本の家庭と變りなく、寧ろ目下日本の新婦人などの、家を顧ず外出のみに日を送るさまを思ひ出でて、耻づかしき心地いたし申候。總じて佛國の上流社会は、英國の上流社会と變ることこれなく、上流はいづれも同じものと感じ申候。東京は益々華美になり行く由、概かはしきことにござ候。どうぞ外國の善きを取り、惡しきを捨てて、外觀のみ飾る人ばかりできぬやうなどと考へ居候。私もできるだけ當國上流婦人のほんたうの生活を見、その善き所を眞似て、どこまでも日本は日本らしくして行くやうにせねばならずと存じ居候。ハイカラ、ハイカラといはれ居るパリの婦人も、前に申上げ候ふ通り、上流の方はなかなかハイカラなるものにてはなく、心地よきほどおとなしく、私の大聲が耻づかしく覺ゆることもたびたびこれあるくらゐ

をこがまし

はすは

(一)筆者の夫利爲。

にござ候かゝること申しては、餘りをこがましく候へども、日本の御身分良き方の中には、随分御元氣過ぐる方もこれあり候ふやう、この頃は見受けられ候ふが、たゞの御元氣なら結構に候へども、餘り御はすはの御方は、當國上流の婦人方には見せたくなき感じいたされ申候。それゆゑ私もこの頃は力めてしとやかにいたし居候へども、生まれつきのおてんばゆゑ、自身ではつと思ふこともたびたびこれあり、わが身ながら愛想が盡き申候。くだらぬことのみ書連ね恐れ入候。何とぞ悪しからず思し召し下され度願上候。また變りしことにてもこれあり候はば、御もらし戴き度願上候。侯爵事目下國境委員長としてデンマークに出張いたし居り、留守にござ候。私は語學勉強と、上流婦人たちの交際とにいそがしく暮し居候。幸ひ至極丈夫に候ふまゝ、御安心なし下され度願上候。しかし、語學の方は年のせいにか、上達の見こみなく、情なくござ候。渡英日記の中

の歌に、

あとやさき言葉ののりも亂しけり

とひつ答へつ口にまかせて

と詠み候ふもの御記憶のはずと存候ふが、愈今以てその通り、なんとも御耻づかしき次第にござ候。またそのうち申上ぐべく、けふはこれにて失禮いたし候。末ながら時節がら御身御大切にあらばされ候ふやう念じ上候。

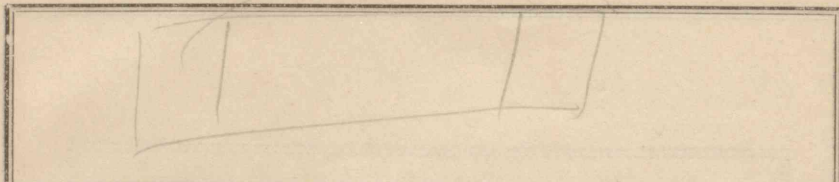
十月十三日

漢子より

師の君

御もとへ参る

故侯爵夫人前田氏事略



平信
豆急
人に見るわよ

改訂女子新國文 卷七 終

作有た合の早中本報
 書お本標りに
 昭西の一月
 莫小らく火
 森音初傳
 後
 終

12



有所權著作

發行所

東京市神田區通神保町九番地

合資會社

富山房

電話神田二四二四・二四三番
振替口座東京五〇一番

大正十二年十二月十五日 訂正再版發行
 大正十五年九月二十八日 訂正三版發行
 昭和元年十二月二十五日 訂正四版印刷
 昭和元年十二月二十七日 訂正四版發行

女子新國文 附

編者 芳賀矢一
 發行者 合資會社 富山房
 代表者 坂本嘉治馬
 印刷所 富山房印刷部

自一卷至四卷	各金七拾錢	自一卷至四卷	各金四拾貳錢
自五卷至八卷	各金六拾六錢	自五卷至八卷	各金四拾錢
昭和三年臨時定價		昭和五年臨時定價	
各金六拾五錢		各金六拾五錢	

113

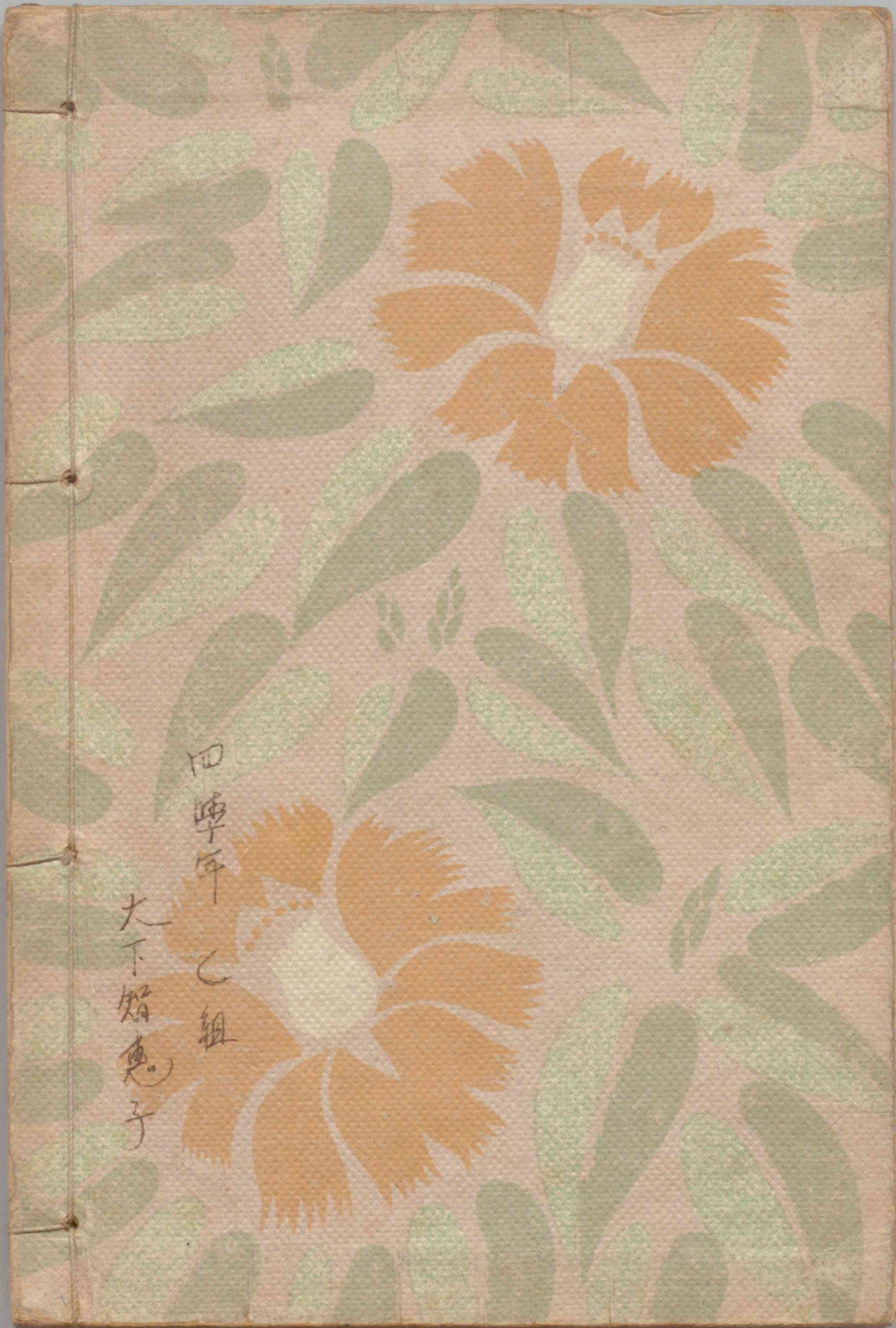
6 125
24

10
4

四
大下原克子

平田
大下原克子

大下原克子



四學年 乙組
大下智恵子